

住吉宮町遺跡第45次発掘調査報告書

2010年

神戸市教育委員会

# 住吉宮町遺跡第45次発掘調査報告書

2010年

神戸市教育委員会

## 序

今回の発掘調査地である住吉は、いわゆる阪神間に位置し、近代の都市化に伴い居住域としての需要が多く、殊に近年は住宅地としての人気が高いところです。かつては谷崎潤一郎の「細雪」にもあるような大洪水や戦災、阪神淡路大震災の惨禍にみまわれましたが、そのたびごとに復興を成し遂げてきました。今回の調査では、古墳時代から奈良時代にかけての住居が多く見つかりました。この当時から多くの人々が行き交い住まうところであったようです。

今回の調査の成果が、地域の歴史を知るための一資料として活用されることを希望します。

最後にこの報告書を刊行するにあたり、現地調査及び報告書作成作業にご理解ご協力いただいた大和システム株式会社をはじめ関係諸機関ならびに関係各位にたいしまして厚く感謝いたします。

2010年3月31日  
神戸市教育委員会

## 例 言

1. 本書は、神戸市東灘区住吉宮町7丁目79番で実施した共同住宅建設に伴う発掘調査の報告書である。
2. 現地における調査は、平成20年7月22日から平成20年10月22日の期間で実施し、神戸市教育委員会文化財課 口野博史、阿部 功が担当した。
3. 遺物整理作業は、平成21年度に神戸市埋蔵文化財センターで実施し、文化財課 黒田恭正、佐伯二郎、口野、阿部が担当した。遺物写真の撮影は独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 牛嶋 茂氏の指導の下、西大寺フォト 杉本和樹氏が行った。
4. 本書に掲載した位置図は、国土地理院発行の25,000分の1地形図「神戸首部」、「西宮」、神戸市発行の2,500分の1地形図、「住吉」の一部を使用した。
5. 本書に用いた方位・座標は、平面直角座標系世界測地系で、標高は東京湾中等潮位（T.P.）で示した。
6. 本書の執筆は、「第2章 調査の成果 出土遺物」の鉄製品については、文化財課 中村大介の助言の下、口野が執筆した。ただし「同章10. 動物遺存体」については、中村が執筆した。これ以外は口野が担当し、編集を行った。出土遺物ならびに図面・写真は、神戸市埋蔵文化財センターに保管している。
7. 発掘調査の実施ならびに本書の刊行に際しては、共同住宅建設の事業主である大和システム株式会社に多大なるご協力をいただいた、記して感謝を申し上げます。

### 調査組織

平成20～21年度

神戸市文化財保護審議会	史跡・考古資料担当
工業 善通	大阪府立狭山池博物館長
和田 晴吾	立命館大学文学部教授
教育委員会事務局	
教育長	樋口 秀志
社会教育部長	黒住 章久（平成20年度）・大寺 直秀（平成21年度）
教育委員会参事	柏木 一孝
（文化財課長事務取扱）	
社会教育部主幹	丸山 潔（平成20年度）
（埋蔵文化財指導係長事務取扱）	
社会教育部主幹	渡辺 伸行
（埋蔵文化財センター所長事務取扱）	
埋蔵文化財調査係長	千種 浩
文化財課主査	丹治 康明
同	安田 滋
同	齋木 巖（平成21年度）
事務担当学芸員	阿部 敬生（平成20年度）
	中谷 正
調査担当学芸員	口野 博史・阿部 功
保存科学担当学芸員	中村 大介
遺物整理担当学芸員	黒田 恭正（平成21年度）
	佐伯 二郎（平成21年度）

# 目次

## 序

### 例言

第1章 調査に至る経過	1
1. はじめに	1
2. 歴史的環境	3
3. 既往の調査	5
4. 調査日誌抄	9
第2章 調査の成果	10
1. 調査の概要	10
2. 基本層序	10
3. 第1遺構面の遺構	13
4. 第2遺構面の遺構	23
5. 小結	26
6. 第1遺構面の出土遺物	27
7. 第2遺構面の出土遺物	35
8. 小結	38
第3章 まとめ	39

### 挿図、挿図写真等目次

第1図 調査地位位置図	1
第2図 周辺主要遺跡分布図	2
第3図 住吉宮町遺跡既調査地及び調査地位位置図	6
第4図 I区及びII区断面図	11
第5図 第1遺構面平面図	12
第6図 SB101平面及び断面図	13
第7図 SB102平面及び断面図	14
第8図 SB103平面及び断面図	15
第9図 SB105平面、遺物出土状況及び断面図	17
第10図 SB106平面、遺物出土状況及び断面図	18
第11図 SB110平面及び断面図	19
第12図 SB111平面及び断面図	20
第13図 SB112平面及び断面図	21
第14図 SX101平面及び断面図	22
第15図 SX102平面、遺物出土状況及び断面図	22
第16図 第2遺構面平面図	24
第17図 水田状遺構平面、遺物出土状況及び断面図	25
第18図 SK201平面及び断面図	26
第19図 遺物包含層1出土遺物実測図	28

第20図 SB101出土遺物実測図	29
第21図 SB102出土遺物実測図	29
第22図 SB103出土遺物実測図	30
第23図 SB105出土遺物実測図	30
第24図 SB106出土遺物実測図	31
第25図 住居、土坑等出土遺物実測図	32
第26図 SX101・SX102出土遺物実測図	33
第27図 遺物包含層2出土遺物実測図	35
第28図 黄色砂出土遺物実測図	37
第29図 SK201・SK203出土遺物実測図	38
第30図 調査地周辺時刻別遺構面断面図	41
表1 住吉宮町遺跡既往調査一覧表	7
表2 第1遺構面建物等方位一覧表	21
挿図1 現地説明会資料表紙	5
挿図写真1 調査作業風景	9
挿図写真2 体験学習風景	9
挿図写真3 空中撮影準備風景	9
挿図写真4 現地説明会風景	9
挿図写真5 現地授業風景	9
挿図写真6 土壌水洗作業風景	9
挿図写真7 遺物整理作業風景	9
挿図写真8 II区北部噴砂検出状況	10
挿図写真9 SB102出土動物遺存体	34
挿図写真10 SB105出土動物遺存体	34
挿図写真11 SB106出土動物遺存体	34
挿図写真12 南辺中央土器群周辺出土動物遺存体	34

## 写真図版目次

- カラー図版 第1遺構面空中写真、  
第2遺構面空中写真、  
調査地周辺空中写真
- P L 1 I区第1遺構面全景南東から、  
II区第1遺構面全景南から
- P L 2 I区第1遺構面全景南東から、  
SB105・SB106検出状況南東から
- P L 3 SB101検出状況北から、  
SB103検出状況東から
- P L 4 SB102検出状況東から、  
SB102検出状況北から
- P L 5 SB105検出状況南から、  
SB105カマド状遺構検出状況
- P L 6 SB106検出状況南から、  
SB109検出状況西から
- P L 7 SB110検出状況西から、  
SB111検出状況北から
- P L 8 SX102遺物出土状況東から、  
SX103遺物出土状況東から
- P L 9 黄色砂遺物出土状況西から、  
黄色砂遺物出土状況北から
- P L 10 I区第2遺構面全景東から、  
I区第2遺構面全景北から
- P L 11 II区第2遺構面全景南から、  
II区SK201遺物出土状況
- P L 12 SB101鉄器出土状況、  
SB105鉄器出土状況、  
SB106土師器甕出土状況、  
SB109西北部須恵器高环出土状況、  
SK103遺物出土状況、  
I区北東部包含層2須恵器环身出土状況
- P L 13 出土石器等写真、出土上錘写真
- P L 14 出土鉄器類写真、  
出土鉄器類レントゲン写真
- P L 15 包含層1出土遺物、SB101出土遺物、  
SB102出土遺物、SB105出土遺物
- P L 16 SB106出土遺物、SB109出土遺物、  
SB111P-3出土遺物、SK103出土遺物
- P L 17 P172出土遺物、SX103出土遺物、  
SX102出土遺物
- P L 18 包含層2出土遺物、黄色砂出土遺物
- P L 19 黄色砂出土遺物、SK201出土遺物、  
SK203出土遺物写真

## 第1章 調査に至る経過

### 1. はじめに

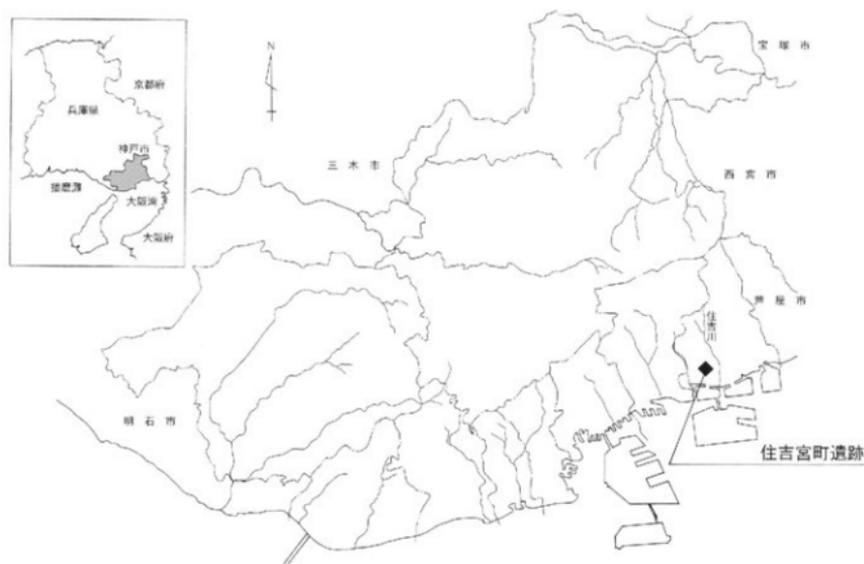
住吉宮町遺跡は、1985（昭和60）年にJR住吉駅の南西で、共同住宅建設に伴い発見された遺跡である。大小さまざまな調査を重ね、今回の調査が45回目の第45次調査となる。

住吉宮町遺跡は、東西約800m・南北約600mの範囲に国道2号線沿いに東西にひろがる遺跡である。六甲山から流れる石屋川や住吉川により形成された標高20m前後の複合扇状地上に位置し、弥生時代から中世におよぶ複合遺跡である。

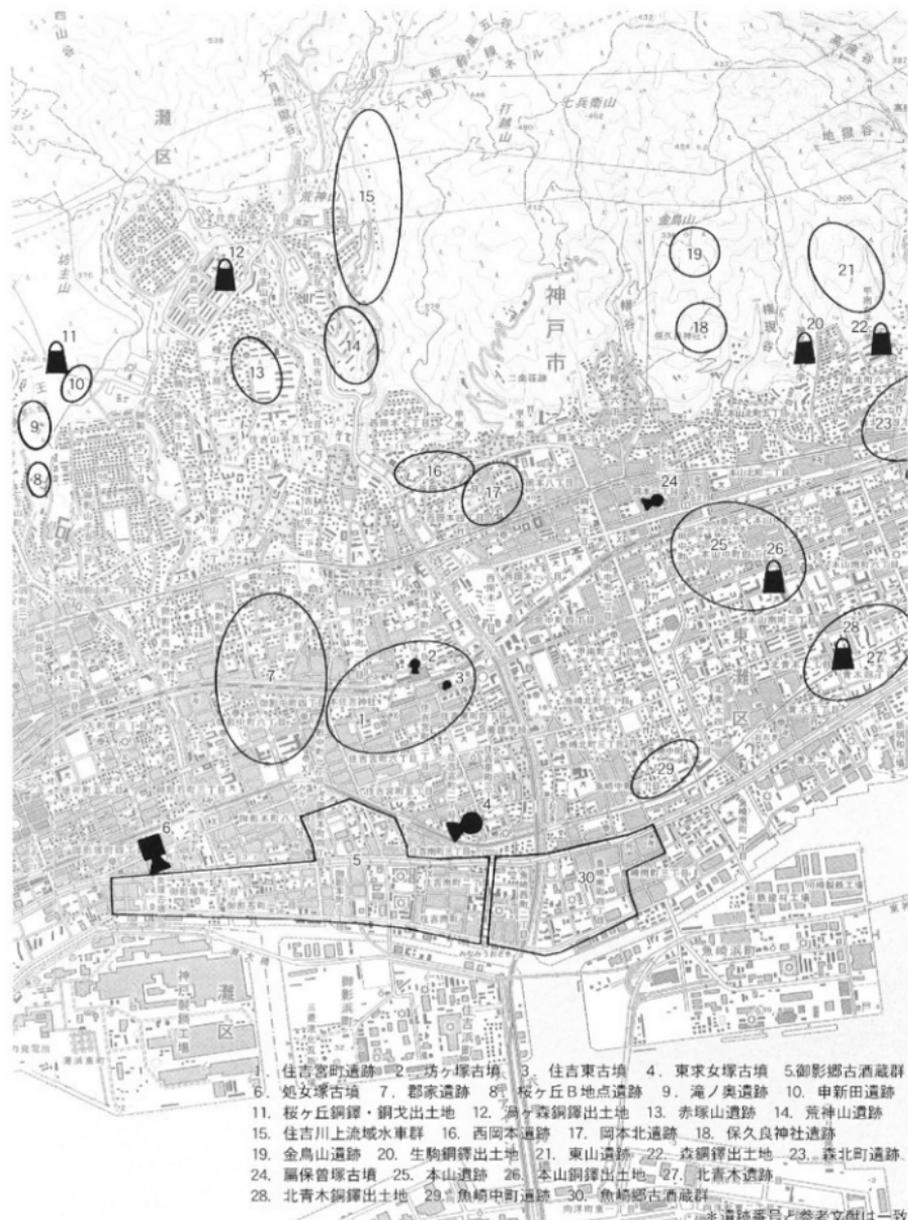
地形図をみると住吉宮町遺跡付近では、JR軌道と国道2号線の線形が平行に弧状を描いている。JR軌道の線形は1874（明治7）年開通時とほぼ同様で、また国道2号線の線形も西国街道さらに山陽道の奈良時代にまでさかのぼってもほぼ同様であろうと考えられる。

JR軌道が標高約25m、国道2号線標高約21mの等高線が描けるようで、これより北側や南側と比べると明らかに傾斜が緩やかになっている。この緩傾斜地を中心に遺跡は存在しているようである。

住吉宮町遺跡の特徴として昭和60年の第1次調査や駅周辺の再開発事業などで発見された古墳群があげられる。これまでに約70基の古墳が検出されている。この古墳の大部分は、一辺10m前後の方墳などで近接して築造された古墳群である。この古墳群はまもなく洪水砂によって地上に痕跡を残すことなく埋もれてしまう。



第1図 調査地位置図



第2図 周辺主要遺跡分布図 S : 1 / 25,000

さらに古墳群より古い弥生時代の周溝墓や堅穴住居なども発見されている。また古墳群と相前後する時代の堅穴住居やさらに新しい時代では、奈良時代の掘立柱建物や井戸なども発見されている。

このように六甲山南麓の地域では、背後に山を負い前面に海が広がる環境のもと、山、川、海からの恵沢と洪水などによる自然災害とたたかひながら、人々の生活は営み続けられてきた。また前面の大飯湾は、食料を得るだけでなく、重要な交通手段でもあった。古来より人々が生活をしていく上で整った生活環境にあり、数多くの遺跡が存在する地域である。次に周辺の遺跡として時代ごとに略述する。

## 2. 歴史的環境

### 旧石器時代から縄文時代

周辺遺跡として旧石器時代に属する遺跡は少なく、滝ノ奥遺跡9で出土した有茎尖頭器や西岡本遺跡16や岡本北遺跡17でナイフ形石器の出土が知られている。

縄文時代では西岡本遺跡や郡家遺跡で縄文早期に属する遺構と遺物が出土している。本山遺跡では縄文時代中期の土器、岡本東遺跡では縄文時代後期の貯蔵穴が知られている。

### 弥生時代

弥生時代になると、前期に属する遺跡として本山遺跡や北青木遺跡などがあげられる。本山遺跡25は、前期から後期にいたる集落である。また畿内最古段階に属する土器とともに農耕具などの木器類も出土している。また別調査地26では、銅鐸が出土している。北青木遺跡27は縄文時代後晩期から弥生時代前期に連続する遺跡である。また銅鐸の舌と考えられる遺物の出土や2006年度には、より旧海岸線に近い地点28で銅鐸が出土している。

さらに六甲山南麓は、全国有数の銅鐸などの青銅器出土地域としても知られる。今述べた銅鐸2個は、海岸線に近い集落内からの出土であるが、桜ヶ丘銅鐸・銅戈出土地11、鴻ヶ森銅鐸出土地12、生駒銅鐸出土地20、森銅鐸出土地22は、集落から離れた箇所からの発見である。また保久良神社遺跡18からは銅戈が1本出土しており、弥生時代の青銅器研究において重要な地域である。また同様に六甲山南麓の尾根上には、西から桜ヶ丘B地点遺跡8、赤塚山遺跡13、荒神山遺跡14、金鳥山遺跡19、東山遺跡21など弥生時代中期から後期にかけての高地性集落が営まれる。

弥生時代後期から古墳時代初期にかけては住吉宮町遺跡1、郡家遺跡7、岡本北遺跡17、森北町遺跡23、魚崎中町遺跡29などの集落があらわれる。

### 古墳時代

古墳時代に入ると、石屋川右岸の海岸線近くには処女塚古墳6、天井川右岸には扁保曾塚古墳24、また住吉川右岸の海岸線近くには東求女塚古墳4などの前期古墳が築造される。埋葬施設に堅穴式石室を築き、青銅鏡が副葬される。中期には住吉宮町遺跡で坊ヶ塚古墳2や住吉古墳3がつくられ、ついで一辺10mから20mの方墳群が形成される。また古墳時代の集落は、郡家遺跡7や森北町遺跡23などがあげられる。後期には、横穴式石室を埋葬施設とする古墳が群集するように築造される。郡家遺跡7や西岡本遺跡16、岡本梅林古墳、生駒銅鐸出土地に近接した生駒古墳などがあり、その築造場所は山裾に多くなるようである。

### 奈良時代から平安時代

古墳時代終末から飛鳥時代の集落は、実態が不明な部分が多いが、住吉宮町遺跡では、これまでの調査で堅穴住居などが検出され、また森北町遺跡23では、7世紀代の棚田とする遺構なども検出されている。

当地域には海運とともに古代では山陽道、近世では西国街道として東西の海上、陸上の往来が盛んで、重要な地域であった。

奈良時代から平安時代にかけての集落は、住古宮町遺跡では、獨立柱建物や井戸、墨書土器などが発見され、郡家遺跡でも大型の掘形を持つ掘立柱建物が検出されている。また平安時代の寺院や経塚などが発見された滝ノ奥遺跡9がある。

## 中世

中世になると山裾部の西岡本遺跡や郡家遺跡から住古宮町遺跡、本山遺跡やさらに東求女塚古墳付近まで中世に属する堆積土がみられる。おそらく明治初期の地形図と大差ない水田や畑の景観がこの地域にひろがっていたと考えられる。

また郡家遺跡や住古宮町遺跡などでは中近世の採石遺構などが検出されている。

## 近世以降

江戸時代には米生産と海運を利用し酒造業、また山麓の水流を利用した水車による精米、搾油業も盛んとなる。南の海岸線には、いわゆる灘五郷を構成する古酒蔵群として御影郷古酒蔵群5、魚崎郷古酒蔵群30が存在し、山麓部には住古川上流域水車群15が生産遺跡として周知されている。

さらに当調査地に近い第17次調査地は、旧住古村役場とされる場所で戦争遺産とされる銃器や焼夷弾などの戦争遺物が出土している。

## 歴史的環境参考文献（文献番号は周辺主要遺跡分布図番号と一致）

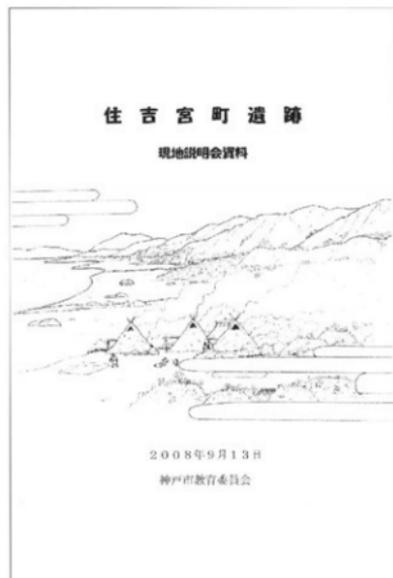
- 1～3 既往の調査履歴及び調査内容については本文7頁表1を参照
- 4 渡辺伸行「東求女塚古墳」昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1985
- 5 井尻格「御影郷がえし蔵 御影郷古酒蔵群第2次発掘調査の記録」神戸市教育委員会2004  
黒田恭正「御影郷古酒蔵群第4次発掘調査報告書-共同住宅建設に伴う発掘調査-」神戸市教育委員会2007
- 6 「史跡処女塚古墳」神戸市教育委員会1985
- 7 既往の調査履歴及び調査内容については、最新刊の石島三和編「郡家遺跡第89次発掘調査報告書」神戸市教育委員会2008本文8、9頁表2及び図5を参照
- 8 新修神戸市史編集委員会編「新修神戸市史」歴史編1自然・考古神戸市1989
- 9 森田隆「滝ノ奥遺跡」昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1983・黒田「滝ノ奥遺跡」平成3年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1994
- 10 8に同じ
- 11 三木文雄他「神戸市桜ヶ丘銅鐸・銅戈調査報告書」兵庫県文化財調査報告書第1冊兵庫県教育委員会1966、69
- 12 「住古村新発見の銅鐸」兵庫県史跡名勝天然記念物調査報告書第一輯兵庫県1935
- 13 8に同じ
- 14 「荒神山遺跡調査概報」神戸市教育委員会1970
- 15 井尻 住古川上流域水車群8箇所水車群確認調査」平成18年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会2009
- 16 浅岡俊夫編「神戸市東灘区西岡本遺跡、六甲山麓遺跡調査会2001・藤井太郎・中村大介「西岡本遺跡第4・5・6次発掘調査報告書」神戸市教育委員会2009
- 17 浅岡俊夫編「神戸市東灘区岡本北遺跡」六甲山麓遺跡調査会1992
- 18 樋口清之「攝津保久良神社遺蹟の研究」駿杉会紀要第四輯 関西学院大学駿杉会1942
- 19 石野博信「神戸市金鳥山遺跡-保久良神社、銅戈出土地点の裏山」古代学研究所第48号古代学研究所1967
- 20 村川行弘「神戸市東灘区本山町中野生駒出土銅鐸」考古学雑誌51-2 1965
- 21 宮本都雄「本山町東山遺跡」昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1987・宮本「本山町東山遺跡-第3次調査-」昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1988
- 22 11に同じ
- 23 中尾さやか・中村「森北町遺跡発掘調査報告書第20次調査発掘試掘調査報告書」神戸市教育委員会2004

- 24 梅原未治「武庫郡本山村マンバイのヘボン塚古墳」兵庫県史跡名勝天然記念物調査報告書第二編兵庫県1925・浅岡俊夫編「神戸市東灘区木山北遺跡」六甲山麓遺跡調査会1995
- 25 丹治康明・須藤宏「本山遺跡」平成元年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1992・安田滋「本山遺跡第17次調査」平成7年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1998
- 26 「本山遺跡第12次調査の概要」神戸市教育委員会1991
- 27 山下史朗編「北青木遺跡」兵庫県教育委員会1986・菅木宏明・石島「北青木遺跡発掘調査報告書—第3次調査—」神戸市教育委員会1999
- 28 東喜代秀・中村・前田佳久・須藤「北青木遺跡発掘調査報告書第5次調査」平成18年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会2009
- 29 岩田明広「神戸市東灘区魚崎中町遺跡（第3次調査）」神戸市教育委員会1996
- 30 関野豊「魚崎郷古酒蔵群第1次調査」・佐伯二郎「魚崎郷古酒蔵群第2次調査」平成10年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会2001

### 3. 既往の調査

1985年の遺跡の発見以来、大小さまざまな調査を重ね、当調査が第45次調査となる。それぞれの調査によって、多くの成果が得られている。調査原因は、共同住宅建設、再開発事業、個人住宅建設など様々である。

調査成果については表1に、また既往の調査地は第3図に示すとおりである。



挿図1 現地説明会資料表紙



第3図 住吉宮町遺跡既調査地及び調査地位置図1/2,500

表1 住吉宮町遺跡既往調査一覧表

次数	調査年度	調査地	調査機関	調査面積 ㎡	主な調査内容	文献
1	85 S60	住吉宮町7	神戸市教育委員会	500	古墳時代後期方墳3基・中世土坑	1
2	85 S60	住吉宮町7	神戸市教育委員会	250	古墳時代後期方墳8基	2
3	85 S60	住吉宮町3	神戸市教育委員会	440	古墳時代・中世の溝	3
4	86 S61	住吉宮町7	神戸市教育委員会	175	古墳時代箱式石棺3基、方墳1基・奈良時代溝	4
5	86 S61	住吉本町1	兵庫県教育委員会	4,300	弥生末期溝墓3基・方墳10基、円墳1基、箱式石棺2基	5
6	87 S62	住吉宮町6	兵庫県教育委員会	90	中近世土坑	15
7	87 S62	住吉本町1	兵庫県教育委員会	90	弥生末期溝墓2基・方墳1基、土器埋蔵1基	6
8	87 S62	住吉宮町7	神戸市教育委員会	30	中世柱穴	7
9	88 S63	住吉町5他	神戸市教育委員会	3,200	弥生末期溝墓・方墳6基、帆立貝式古墳1基、竪穴住居17棟・奈良獨立柱建物9棟	8
10	88 S63	住吉本町1	兵庫県教育委員会	125	弥生後期土器・方墳3基	6・9
11	88 S63	住吉宮町6	神戸市教育委員会	1,300	弥生中期竪穴住居2棟・弥生末期竪穴住居5棟・9.11C 掘立柱建物5棟、地鎮遺構	10
12	88 S63	住吉本町1他	兵庫県教育委員会	385	方墳2基・中世溝、石垣状遺構	9
13	89 H元	住吉東町5	(財)神戸市スポーツ教育公社	165	古墳時代竪穴住居1棟、掘立柱建物1棟、方墳2基・奈良時代掘立柱建物2棟	11
14	90 H2	住吉宮町6	神戸市教育委員会	500	古墳時代竪穴住居2棟・奈良時代掘立柱建物2棟、井戸3基	12
15	92 H4	住吉宮町7	神戸市教育委員会	50	中世遺物包含層、土石流	13
16	93 H5	住吉宮町6	神戸市教育委員会	275	古墳時代洗路・平安時代掘立柱建物2棟、五世採石址	14
17	95 H7	住吉宮町7	神戸市教育委員会	400	方墳8基、竪穴住居16棟、掘立柱建物7棟	15
18	95 H7	住吉宮町7	神戸市教育委員会	16	横穴石室(古墳1基)	15
19	95 H7	住吉宮町4	神戸市教育委員会	500	弥生後期土器・方墳3基、箱式石棺1基・平安時代掘立柱建物1棟	16
20	96 H8	住吉宮町6	神戸市教育委員会	280	古墳、飛鳥、奈良時代河道・石組遺構	16
21	96 H8	住吉宮町4	神戸市教育委員会	200	古墳後期竪穴住居1棟・古墳末期竪穴住居2棟、掘立柱建物1棟・奈良獨立柱建物1棟	17
22	96 H8	住吉宮町4	神戸市教育委員会	100	古墳時代末溝、落ち込み・奈良時代ピット	17
23	96 H8	住吉宮町6	神戸市教育委員会	350	奈良時代井戸、墨書土器	18
24	96 H8	住吉本町1	神戸市教育委員会	450	弥生末土器・方墳4基、箱式石棺	19
25	97 H9	住吉宮町3	神戸市教育委員会	500	弥生末期竪穴住居1棟・古墳掘立柱建物2棟・中世墓	20
26	97 H9	住吉宮町3	神戸市教育委員会	100	古墳竪穴住居1棟、奈良獨立柱建物1棟	21
27	97 H9	住吉宮町7	神戸市教育委員会	900	弥生竪穴住居1棟・古墳時代土坑墓1基、溝	22
28	97 H9	住吉本町1	神戸市教育委員会	360	葎石、周溝(坊ヶ塚古墳)	23
29	97 H9	住吉宮町6	神戸市教育委員会	120	中世溝、土坑	24
30	97 H9	住吉本町1	神戸市教育委員会	765	弥生中期溝・弥生末溝・方墳6基、箱式石棺1基、竪穴住居1棟・古代～中世掘立柱建物2棟	25
31	97 H9	住吉本町1	神戸市教育委員会	300	中世掘立柱建物1棟・石組遺構	26
32	98 H10	住吉宮町4	神戸市教育委員会	3,260	弥生後期竪穴住居6棟・方墳9基、円墳1基、箱式石棺9基	27
33	98 H10	住吉宮町6	兵庫県教育委員会	1,300	弥生末古墳初頭竪穴住居9棟・奈良平安獨立柱建物2棟	28
34	98 H10	住吉宮町6	兵庫県教育委員会	40	弥生後期土坑・古墳後期柱列・奈良旧河道	29
35	01 H13	住吉本町1	神戸市教育委員会	170	方墳1基、葎石、埴輪列	30
36	01 H13	住吉宮町3	神戸市教育委員会	150	古墳時代後期竪穴住居1棟	31
37	02 H14	住吉宮町6	神戸市教育委員会	900	弥生末土坑・古墳後期溝・平安獨立柱建物1棟、溝、土坑	32
38	03 H15	住吉宮町4	神戸市教育委員会	80	方墳(1基)	33
39	04 H16	住吉宮町3	神戸市教育委員会	20	古墳時代後期竪穴住居1棟、掘立柱建物2棟	34
40	05 H17	住吉宮町6	神戸市教育委員会	200	古墳後期竪穴住居1棟・平安獨立柱建物1棟・近世採石址	35
41	05 H17	住吉宮町7	神戸市教育委員会	15	弥生末土坑	36
42	06 H18	住吉宮町4	神戸市教育委員会	180	方墳1基、掘立柱建物1棟	37
43	06 H18	住吉宮町3	神戸市教育委員会	60	弥生末溝・古墳後期竪穴住居1棟	37
44	06 H18	住吉本町1	神戸市教育委員会	70	方墳2基、遺棄1基、落ち込み1基	37
45	08 H20	住吉宮町7	神戸市教育委員会	427	古墳後期竪穴住居9棟、掘立柱建物3棟、水田	本書

復興支援

31 第31次調査のり排内に入らず

- 1 西岡誠司・山本雅和「住吉宮町遺跡 第1次調査」昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1988 1
- 2 山本「住吉宮町遺跡—第2次調査—」昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1988
- 3 口野史夫「住吉宮町遺跡—第3次調査—」昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1988 3
- 4 山本「住吉宮町遺跡—第4次—」昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1989 4
- 5 渡辺守・高瀬一嘉「坊々塚遺跡(住吉宮町遺跡群Ⅱ)」兵庫県教育委員会1989 5
- 6 渡辺「住吉宮町遺跡群Ⅰ(坊々塚遺跡)」兵庫県教育委員会1989 7・10
- 7 西岡「住吉宮町遺跡第5次」昭和62年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1990(調査一覧表) 8
- 8 丹治康明・須藤・東喜代秀「住吉宮町遺跡第9次調査」昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1994 9
- 9 西口圭介・久保弘幸  
「住吉宮町遺跡発掘調査報告書—住吉南線一部新設工事及び住吉駅ビル建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—」  
兵庫県教育委員会1991 10・12
- 10 丸山潔・須藤・松林安典「住吉宮町遺跡第11次調査」神戸市教育委員会1990  
丸山・須藤・松林「住吉宮町遺跡第11次調査」昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1994 11
- 11 橋詰浩幸「住吉宮町遺跡」平成元年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1992 13
- 12 丹治・山本・谷正敏・池田毅・橋詰「住吉宮町遺跡」平成2年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1993 10
- 13 内藤俊哉「住吉宮町遺跡第15次調査(調査一覧表)」平成4年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1995 5
- 14 谷「住吉宮町遺跡第16次調査(調査一覧表)」平成5年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1996 16
- 15 小野田義和・秦憲二  
「住吉宮町遺跡(第17次・第18次調査)—阪神・淡路大震災復興に伴う発掘調査—」神戸市教育委員会1998  
小野田・秦「住吉宮町遺跡第17次調査・第18次調査」平成7年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1998 17・18
- 16 小野田・目次謙一・岸岡貴英・大西貴夫  
「住吉宮町遺跡(第19次・第20次調査)—阪神・淡路大震災復興に伴う発掘調査—」神戸市教育委員会2001  
小野田・目次・岸岡・大西  
「住吉宮町遺跡第19次調査・第20次調査」平成8年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1999 19・20
- 17 川上厚志「住吉宮町遺跡第21次調査」・「住吉宮町遺跡第22次調査」  
平成8年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1999 21・22
- 18 菊池逸夫・神野信「住吉宮町遺跡第23次調査」平成8年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1999 23
- 19 安田滋・菅木宏明・千種浩・中村人介・平田明子  
「住吉宮町遺跡第24次・第32次発掘調査報告書」神戸市教育委員会2001 24  
安田「住吉宮町遺跡第24次調査」平成8年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1999 24
- 20 内藤「住吉宮町遺跡第25次調査」平成9年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会2000 25
- 21 浅谷誠吾「住吉宮町遺跡第26次調査」平成9年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会2000 26
- 22 西岡・関野豊「住吉宮町遺跡第27次調査」平成9年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会2000 27
- 23 菅本・坊々塚古墳試掘調査」平成9年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会2000 28
- 24 阿部敬生「住吉宮町遺跡第28次調査」平成9年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会2000 29
- 25 菅本・平田「住吉宮町遺跡第29次調査」平成9年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会2000 30
- 26 内藤「住吉宮町遺跡第30次調査」平成9年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会2000 31
- 27 安田・菅本・千種・中村・平田「住吉宮町遺跡第24次・第32次発掘調査報告書」神戸市教育委員会2001 32
- 28 菅本・中村・平田「住吉宮町遺跡第31次調査」平成9年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会2000 32
- 29 服部 寛・栗川 旭「住吉宮町遺跡第33次調査」兵庫県教育委員会2002 33
- 30 関野「住吉宮町遺跡第33次調査」平成10年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会2001 34
- 31 阿部「住吉宮町遺跡第35次調査」平成13年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会2004 35
- 32 東・阿部功「住吉宮町遺跡第36次調査」平成13年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会2004 36
- 33 井尻裕・小村「住吉宮町遺跡第37次発掘調査報告書」神戸市教育委員会2003 37
- 34 井尻「住吉宮町遺跡第37次調査」平成14年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会2005 37
- 35 中岡さか「住吉宮町遺跡第38次調査」平成15年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会2006 38
- 36 浅谷「住吉宮町遺跡第39次調査」平成16年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会2007 39
- 37 中谷正「住吉宮町遺跡第39次調査」平成17年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会2008 40
- 38 中尾「住吉宮町遺跡第41次調査(調査一覧表)」平成17年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会2008 41
- 39 富山直人・須藤・中谷  
「住吉宮町遺跡第42次調査・第43次調査・第44次調査」平成18年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会2009 42・43・44

4. 調査日誌抄

1. 調査に至る経過

2007. 11. 20 文化財保護法に基づく届出  
2008. 03. 04 試掘調査、  
発掘調査のための事前協議

2. 調査経過

2008. 07. 22 発掘調査着手  
重機掘削残土搬出作業



挿図写真1 調査作業風景

2008. 08. 04 大手前大学文学部考古学実習  
大学講師1名・学生2名  
2008. 08. 20 基準点測量実施  
2008. 08. 21 六甲アイランド高校体験学習  
引率教諭2名生徒5名



挿図写真2 体験学習風景

2008. 09. 12 ラジコンヘリコプターによる  
空中撮影作業（1回目）及び  
全景写真



挿図写真3 空中撮影準備風景

2008. 09. 13 現地説明会開催 参加者320名



挿図写真4 現地説明会風景

2008. 09. 16 御影高校日本史現地授業  
引率教諭1名生徒8名



挿図写真5  
現地授業風景

2008. 10. 16 土壌水洗作業



挿図写真6  
土壌水洗作業風景

2008. 10. 17 ラジコンヘリコプターによる  
空中撮影作業（2回目）及び  
全景写真

2008. 10. 22 現地調査完了

3. 遺物整理

2009. 07. 01 遺物整理開始  
神戸市埋蔵文化財センターにて



挿図写真7 遺物整理作業風景

## 第2章 調査の成果

### 1. 調査の概要

調査対象地は、全敷地（約932㎡）内の西と東の2箇所である。西側の国道2号線に面した東西約18m南北約17mの七角形の調査区（約298㎡）と東西約5m南北約19mの矩形の調査区（約129㎡）で、それぞれをⅠ区とⅡ区とした。

遺構面は2面検出された。それぞれの遺構面の上には一定した堆積ではないが、遺物包含層に覆われている。第1遺構面は、古墳時代後期から奈良時代にかけての遺構面である。第2遺構面は、古墳時代後期の遺構面である。

第1遺構面では、Ⅱ区北部を除き多数の遺構が検出された。内容は竪穴住居9棟、掘立柱建物3棟、土坑17基、落ち込み状遺構4箇所、溝状遺構3条、ピット200箇所以上などである。

第2遺構面では、水田状遺構、土坑6基、溝状遺構4条、ピット30箇所などが検出された。

Ⅰ区中央から東辺にかけて東西にのびる攪乱孔やⅡ区南部に検出された攪乱孔は、現地表以前に存在した旧地形である水田もしくは畑の段差を示すものである。この下層に存在する遺構は、この旧地形に少なからず影響を与えているようである。

調査で出土した遺物の量は、遺物収納用コンテナ（容量28ℓ）に換算しておよそ23箱であった。

出土遺物は現地作業終了後、神戸市埋蔵文化財センターに搬入し整理作業を実施した。遺物の水洗作業と平行して鉄器類などの遺物とを選別し、土器類は必要な注記作業をへて、復元作業、遺物実測作業を行った。その後それぞれの遺物に応じて石膏による補強、復元作業さらに色付け作業を行った。鉄器はレントゲン撮影後、錆除去作業、実測作業、防錆処置を行った。また報告書掲載に必要な遺物写真撮影を行うと同時に層位、遺構ごとに整理し上記コンテナボックスに収納し、現在神戸市埋蔵文化財センターに保管している。

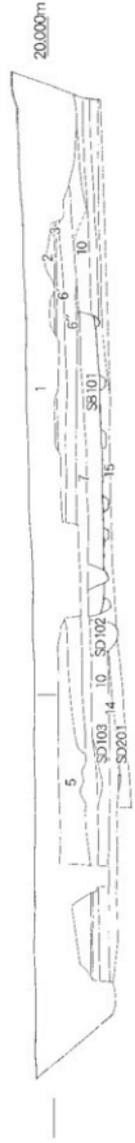
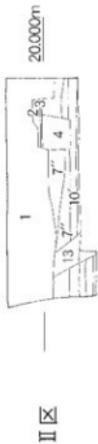
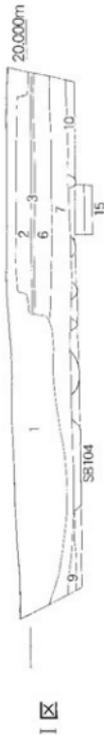
### 2. 基本層序

基本層序は、単純化して述べると現代盛土層、旧耕土、黄褐色砂層（中世以前の洪水砂）、茶褐色泥砂層（遺物包含層1）、暗褐色泥砂層（遺物包含層2）、黄褐色混雑泥砂層となる。包含層1、2を取り除いたそれぞれの面が第1遺構面、第2遺構面となる。しかしながらそれぞれの遺構面上層には、部分的な堆積層が存在し、遺構面は均一な土層ではなかった。第1遺構面の標高は約19m前後で、第2遺構面の標高は約18.8m前後となる。

Ⅱ区西壁断面観察から、現代盛土と近世頃の堆積層の間には黄褐色の粗砂があり、層序から阪神大水害のものと考えられる。Ⅰ区では、この堆積土は、観察されなかった。またⅡ区北壁断面に噴砂と考えられる黄褐色礫砂が第1遺構面、第2遺構面を切って下層から上がっている状態が観察される。幅は約0.5mの大きな噴砂である。



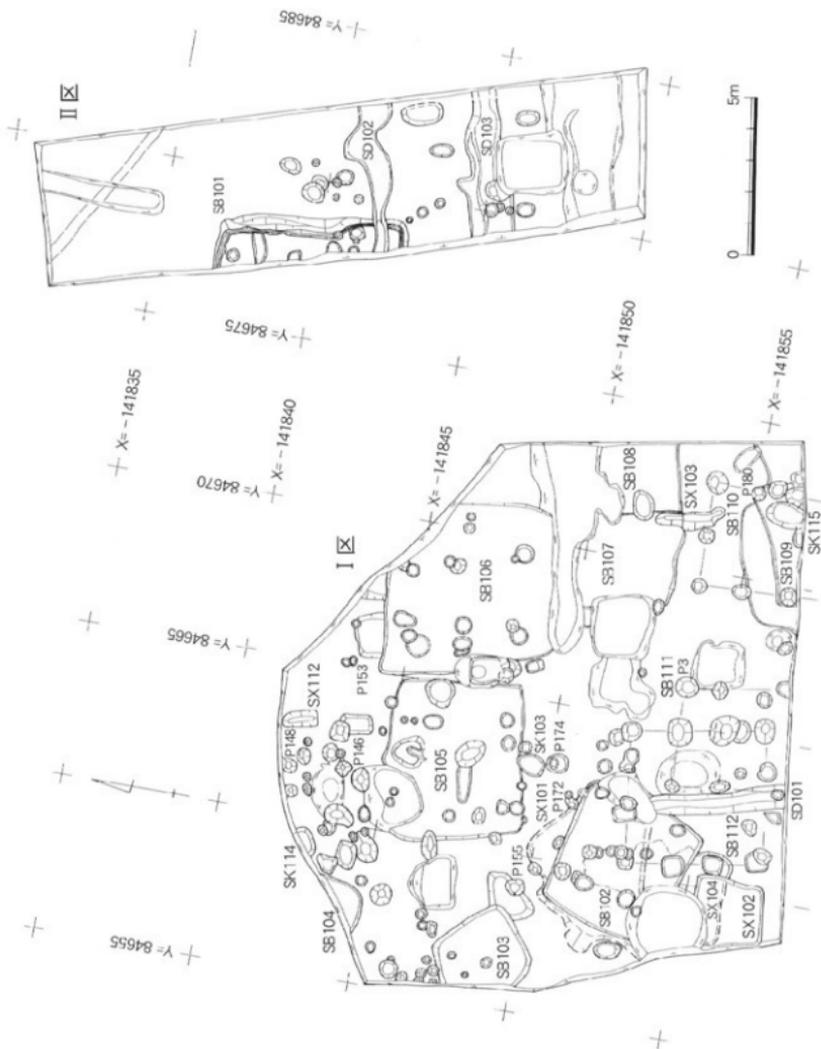
挿図写真8 Ⅱ区北部噴砂検出状況



第4図 I区及びII区断面図

上段の2区 I区 上側 北壁断面実測図 下側 西壁断面実測図  
 下段の2区 II区 上側 北壁断面実測図 下側 西壁断面実測図

1 現代盛土層 6 黄褐色泥砂  
 2 旧耕土 7 茶褐色泥砂 (遺物包含層 1) 12 暗褐色混雜泥砂  
 3 床土 8 灰色泥砂 13 黄褐色砂 (噴砂)  
 4 暗埴 9 褐色泥砂 14 黑褐色泥砂  
 5 黄褐色泥砂 (近世以降の洪水砂) 10 暗褐色泥砂層 (遺物包含層 2) 15 黄褐色粘雜泥砂



第5图 第1遺構面平面图

### 3. 第1遺構面の遺構

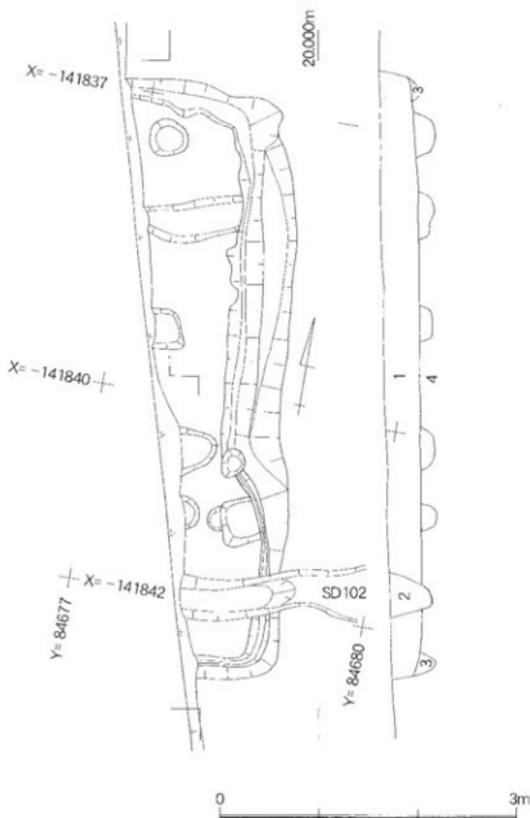
#### 1. SB101

Ⅱ区で検出された一辺6m足らずの竪穴住居である。平面図で明らかのように、東辺部のみ検出されたため遺構の全容は不明である。遺構の残存状況は比較的良好で幅約0.2mの周壁溝をもち、遺構の深さは約0.3mである。遺構内の堆積土はわずかに炭化物を含む茶褐色泥砂で、土師器片と須恵器が出土したが、図化できる遺物は少量であった。後述するSB105とSB106とはほぼ同様の軸線である。

SD102は、SB101を切り、幅0.3~0.6m、深さ0.1~0.3mの蛇行する溝状遺構である。またSB101の中で急激に深くなる。このことから西方向へ流れる溝状遺構であろう。

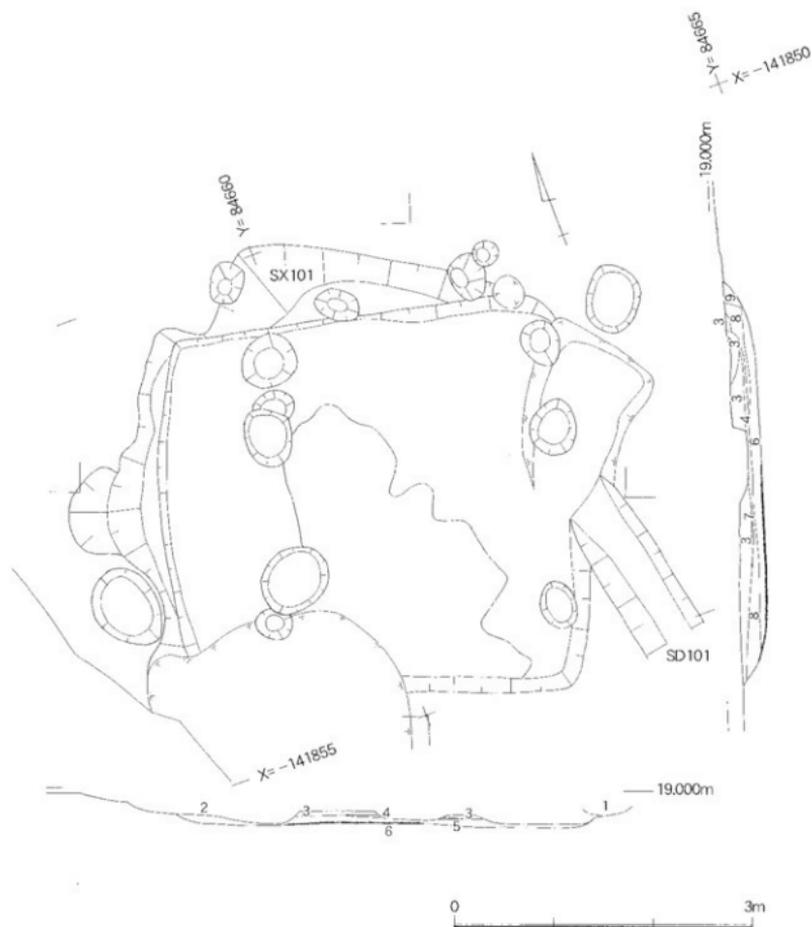
SD103は、SB101の南側で検出された溝状遺構である。幅0.6~1.0m、深さ0.1~0.2mの規模である。西へ幅が広がり、やや下がっていくことから、SD102と同様西方向へ流れる溝状遺構であろう。

その他土坑、ピットが検出されたが、建物などにまともなものはなく、また特記すべき遺物の出土もなかった。



第6図 SB101平面及び断面図

- 1 褐灰色泥砂
- 2 灰褐色細砂 (SD102)
- 3 暗褐色細砂
- 4 黄褐色混礫泥砂



第7図 SB102平面及び断面図 破線内：暗茶褐色粗砂堅く締まる

- |                 |                  |               |
|-----------------|------------------|---------------|
| 1 灰褐色砂泥 (SD101) | 4 黄褐色混雑泥砂        | 7 黄色砂泥        |
| 2 灰褐色細砂 (SX101) | 5 灰褐色砂           | 8 黄褐色泥砂 (粗砂混) |
| 3 灰褐色泥砂 (炭、煨土)  | 6 暗茶褐色粗砂 (炭混、硬い) | 9 淡灰褐色泥砂      |

2. SB102

I区南西部で検出された東西4.2m、南北3.9mの竪穴住居である。遺構の深さは約0.3m足らずである。遺構上面は現代の攪乱とSX101によって切られており、また遺構の四周は砂質土で形成され、遺構の肩にあたる部分は崩れやすい状況であった。このためか周壁溝は検出されず、また断面図に示すように遺構の肩はなだらかである。またSB102の下層も黄褐色混雑粗砂で歩くと足形が残るような土質である。

床面には計8ヶ所のピットが検出されたが、四隅の4ヶ所が支柱穴と考えられる。東西柱間2.9m、南北柱間2.7mである。

前記のように遺構の肩は粗砂層で脆弱な土質である反面、床面の破線で示した範囲は炭化物と焼土で堅く締まっており、先に述べたようにSB102の床として形成されたものと判断される。炭化物や灰と熱により堅く締まったのであろうか。また北辺から中央部にかけてまとまった炭化物と焼土が検出された。

3. SB103

I区西部で検出された東西2.6m、南北2.7mのほぼ方形の掘形の遺構である。竪穴住居として調査作業をすすめたが、遺構底面にはピットは検出されなかった。底面から約0.1m下げた段階で北側にピットが3ヶ所検出された。支柱穴と考えがたく、別の性格を持つ遺構として考えるべきものであろうか。

土師器、須恵器、鉾滓、有孔円盤が出土した。平面上の×が、鉾滓の出土位置である。SK113は、北をSB103に南辺をP155に切られる三角形の土坑である。長辺1.9m、深さ0.2mの規模で土師器、須恵器の小片が少量出土した。

4. SB104

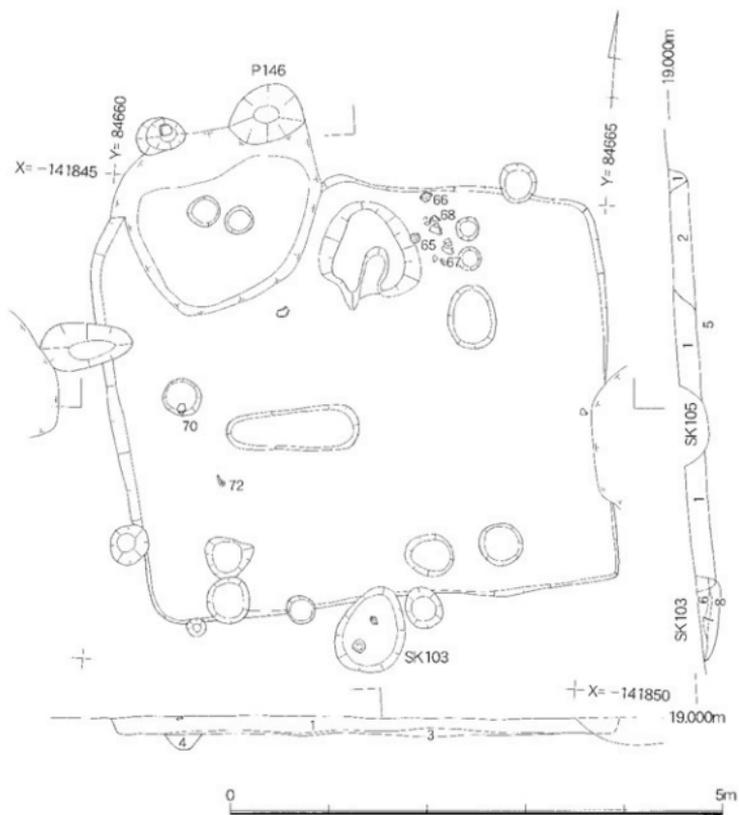
I区北西部で検出された竪穴住居であるが、南東隅部のみであるため、全体規模などは不明である。深さ0.2m足らずであった。少量の土師器、須恵器が出土した。図化できたものは1点(84)のみである。



第8図 SB103平面及び断面図

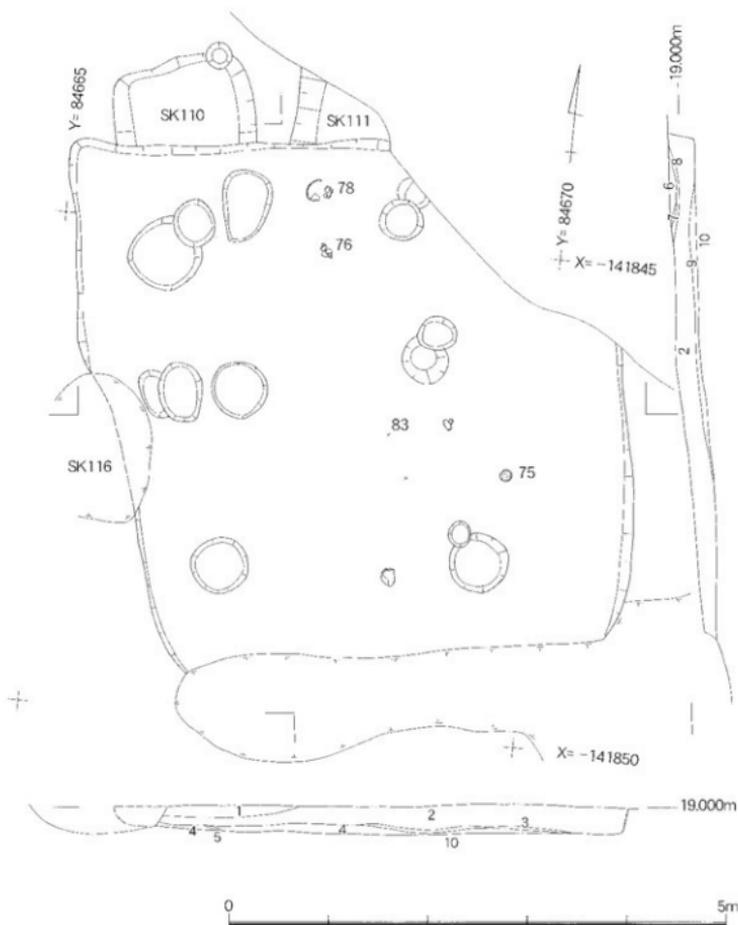
- 1 暗褐色砂泥
- 2 茶褐色泥砂

5. SB105 I区中央で検出された東西4.2m、南北5.0mのやや東西に長い矩形の竪穴住居である。遺構の深さは約0.2m足らずで周壁溝は検出されなかった。床面の東西方向はほぼ水平であるが、南北方向はやや南に傾斜している。北辺中央にふくらみがありこの南側にカマド状遺構が検出された。カマド状遺構は、東西1.1m、南北1.1m、高さ0.1m以上のC字状の高まりで炭化物や焼土を多く含む粘質土によって形成されている。カマド状遺構を構成する土壌を採取し、現地にて土壌洗浄をおこなった。調査作業の結果、土師器、須恵器の小片、炭化物のほか骨の破片が検出された。同様の調査作業は、SB102の焼土およびSB106の焼土についてもおこない、同様の遺物が検出された。
- カマド状遺構の東側で土師器甕や須恵器環などが出土した。西辺では、砥石と鉄製品が出土した。その他土師片が出土した。
- SK103は、SB105の南辺を切る長径0.9m、短径0.7m、深さ0.3m卵形の土坑である。土師器環、須恵器環身が出土した。古墳時代末ころでSB105と大差ない時期の遺構であろう。
6. SB106 I区中央で検出された東西5.2m、南北5.2m以上の竪穴住居である。南辺は攪乱によって損なわれているが、ほぼ攪乱の北辺が遺構の南辺にあたると思われる。遺構の深さは約0.2m足らずで周壁溝は検出されなかった。床面は南にやや傾斜している。北辺中央では径1.0m前後の範囲に焼土が集中しており、このあたりから土師器の甕が出土した。また南西部でも土師器甕、須恵器環、鉄製品、鉾滓などが検出された。平面図中央の×印北側は83の鉄釘、南側×印は、鉾滓である。南辺床面からは、焼石が出土した。その他堆積土から土師器、須恵器が出土した。
- 床面から13ヶ所のピットが検出された。ピットの検出状況から支柱穴は6ヶ所で、数回の変換があったと考えられる。
- SK110からは、少量の土師器、須恵器片とともに鉾滓が1点出土している。
7. SB107・SB108 I区南東部で検出された竪穴住居である。北側は両者攪乱を受け、SB107は南辺と東辺が検出され、SB108はSB107に西側を切られ南辺のみが検出された。遺構の残存状況は悪く遺構の深さは0.1m程度であった。
- 平面形状から竪穴住居と考え調査を行ったが、それぞれ床面からのピットは検出されなかった。それぞれの遺構からは少量の土師器、須恵器が出土した。またSB107からは鉾滓が3点出土している。
8. SB109 I区南東部で検出された竪穴住居である。遺構の北端部分が検出されたに過ぎず、北辺4.0m、深さ0.1mほどの残存状況であった。北辺と西辺には不整形な形状であるが、幅約1mのベッド状の遺構が検出された。深さは0.05～0.1mほどで、必ずしも明瞭な遺構とはいえない。ベッド状の遺構西北隅部で趾端部の欠損した須恵器高環が出土している。
9. SB110 I区南東部で検出された東西2間、南北2間の掘立柱建物である。東西柱間1.6m、南北柱間1.4mであることから、東西棟であろうと考えられる。柱穴は直径0.4～0.6m、深さ0.2～0.4mの規模で、明確な柱痕は検出されなかった。また柱材も出土しなかった。
- SB109との切りあい関係は、必ずしも明確とはいえず、SB109の堆積土を掘削する過程で南半部の柱穴も検出された。状態としてはSB109をSB110の柱穴が切っている。
- 東辺柱穴列中央のP180から須恵器環身が出土している。
- SK115は、SB110の柱穴を切って検出された土坑である。東西0.8m、南北1.1m以上、深さ0.3mの規模である。南端は調査区外で不明である。土師器、須恵器などが出土している。須恵器環から奈良時代の遺構と考えられる。



第9図 SB105平面、遺物出土状況及び断面図

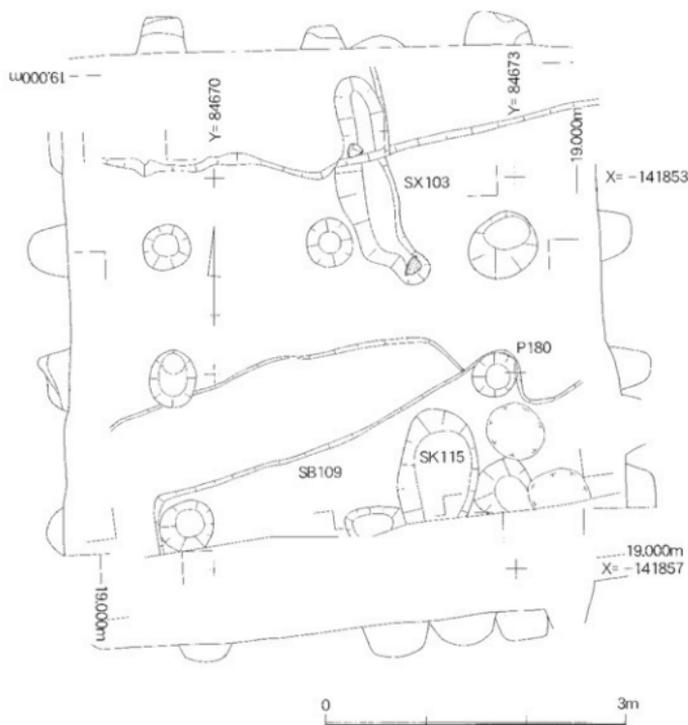
- |               |              |                         |
|---------------|--------------|-------------------------|
| 1 暗灰褐色泥砂      | 4 茶褐色泥砂 (P3) | 6 淡茶褐色泥砂 (炭、焼土混)        |
| 2 褐色泥砂 (焼土、炭) | 5 濁黄褐色混礫泥砂   | 7 黄色粗砂                  |
| 3 灰褐色泥砂 (炭混)  |              | 8 茶褐色泥砂 (6, 7, 8 SK103) |



第10図 SB106平面、遺物出土状況及び断面図

- |             |                  |                  |
|-------------|------------------|------------------|
| 1 暗黄褐色泥砂泥   | 4 暗茶褐色泥砂 (炭多く含む) | 7 淡赤褐色泥砂 (炭多く含む) |
| 2 茶褐色泥砂     | 5 灰褐色砂 (焼土)      | 8 淡赤褐色泥砂         |
| 3 黄褐色砂泥     | 6 淡赤褐色泥砂         | 9 黑褐色砂泥          |
| 10 濁黄褐色混雑粗砂 |                  |                  |

SX103は、SB107・SB108の堆積上を除去すると北半部分があらわれた。南北に長い不整形な溝状遺構である。南北約2.5m、幅0.4~0.6m、深さ0.2mの溝状の遺構で、遺構の南端で、須恵器蓋が出土した。



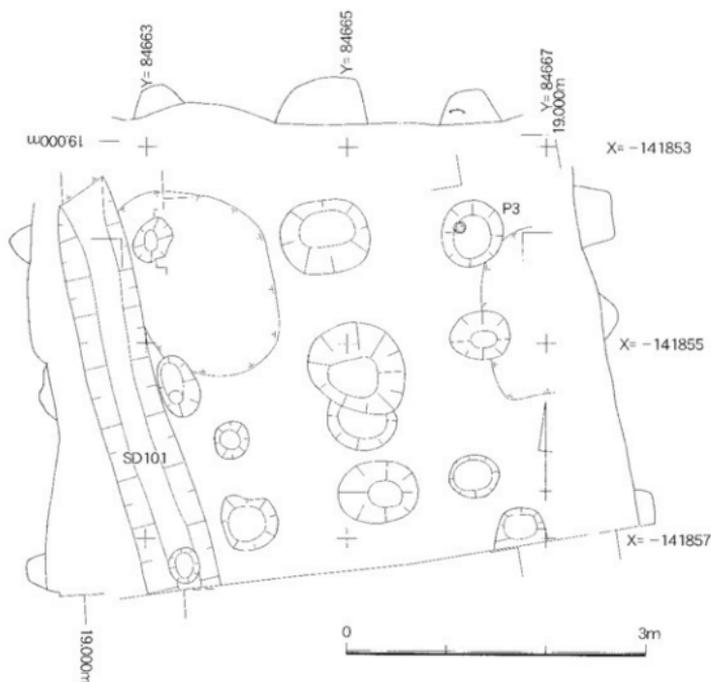
第11図 SB110平面及び断面図

## 10. SB111

I区南部中央で検出された東西2間、南北2間以上の掘立柱建物である。東西柱間1.4～1.8m、南北柱間1.2～1.8mである。柱穴は直径0.4～0.8m、深さ0.2～0.5mの規模で、柱痕はいずれの柱穴も明確ではない。北東隅柱穴P3から、須恵器坏身が出土した。

SD101は、幅0.7m、深さ0.2mの南北方向にのびる溝状遺構である。SB102を切っているが、SB102の北側には検出されなかった。少量の土師器、須恵器が出土した。

またSD101の南端底でSB111-P8が検出された。遺物90と遺物93のみを比べると時期差はそれほどないように思われる。



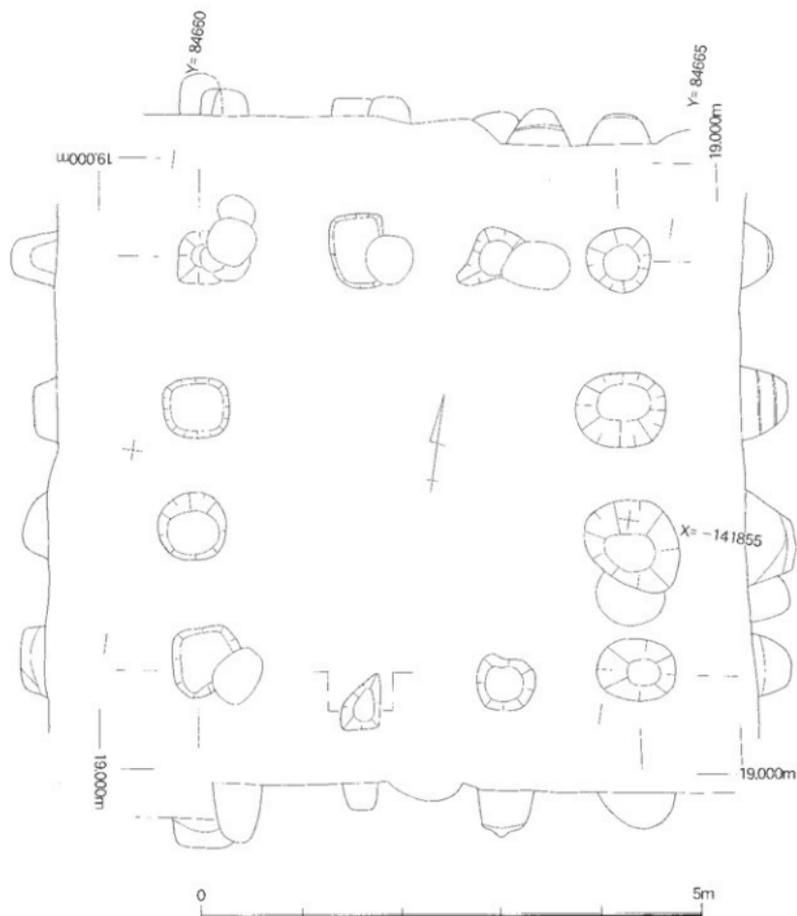
第12図 SB111平面及び断面図

## 11. SB112

I区南西部で検出された東西3間、南北3間の掘立柱建物である。東西柱間1.2～1.4m、南北柱間1.2～1.4mである。柱穴は直径0.5～1.0m、深さ0.2～0.5mの規模で、柱痕はいずれの柱穴も明確ではない。

## 12. SX101

I区南西部で検出された東西5.6m、南北3.8m、深さ0.3mの落ち込み状遺構で、層位的にはSB102を覆うように検出された遺構である。遺構の中央から東側にかけて現在の攪乱坑によって損なわれている。遺構内堆積土は、灰色の砂で一部焼上を含む。五角形の形状で、堆積状況から掘り込まれた遺構というものではなく、小規模な洪水の結果としての堆積ではないかと考えられる。土師器、須恵器、瓦石、土鍾などが出土した。



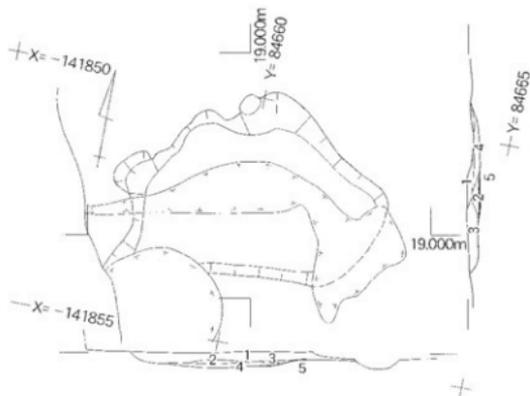
第13圖 SB112平面及び断面図

表2 第1遺構面建物等方位一覧表

遺構名	形状等	規模	主な出土遺物等	方位	時期
SB101 (Ⅰ区)	方形	1辺約3.0m	鉄器・周壁溝	N 2° W	古墳時代後期
SB102	方形	1辺約4.2m	磁石・土師 橋土	N 9° W	古墳時代後期
SB103	方形	東西約2.6m×南北約2.7m	磁滓・有孔円盤	N 10° W	古墳時代後期
SB104	方形	東西約1.3m×南北約1.2m		N 9° W	古墳時代後期末～飛鳥時代
SB105	方形	東西約1.2m×南北約5.0m	板石・飯柄審 カマド	N 8° W	古墳時代後期末～飛鳥時代
SB106	方形	東西約5.2m×南北約5.2m	鉄器・刀子・土麻 礫	N 8° W	古墳時代後期末～飛鳥時代
SB109	方形	東西1辺約4.0m		N 20° W	古墳時代後期
SB110 (獨立柱建物)	側柱	2間 (3.2m) × 2間 (2.8m) 東西棟		N 2° W	古墳時代後期末～飛鳥時代
SB111 (獨立柱建物)	総柱	2間 (3.2m) × 2間 (3.4m) 以上 南北棟		N 9° W	古墳時代後期末～飛鳥時代
SB112 (獨立柱建物)	側柱	3間 (4.2m) × 2間 (4.2m)		N 10° W	古墳時代後期末～飛鳥時代
SX102	方形	東西約2.0m×南北約2.0m	土師	N 8° W	飛鳥時代

13. SX102

一辺2.0mの方形の平面形を持つ深さ0.2m足らずの落ち込み状遺構である。遺構の底面には柱穴などは検出されず、小型の堅穴住居ではなく、また遺物量から廃棄用土坑とも考え難く、用途は不明の遺構である。土師器、須恵器、土鍾などが出土した。遺物から飛鳥時代の遺構と考えられる。



第14図 SX101平面及び断面図

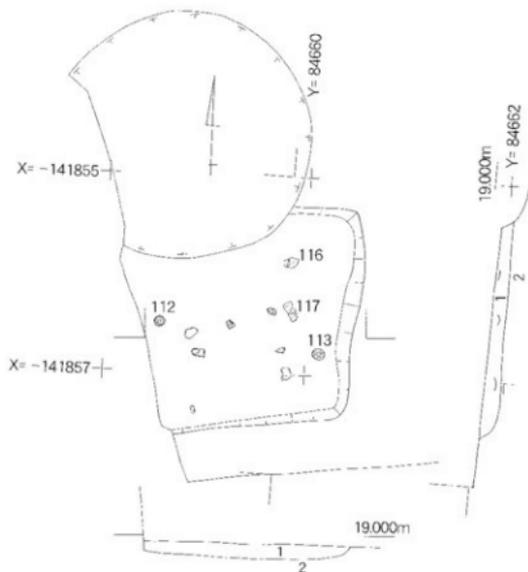
- |               |                |
|---------------|----------------|
| 1 灰色泥砂        | 4 黄褐色砂泥 (炭、焼土) |
| 2 灰色泥砂 (炭、焼土) | 5 黄灰色砂         |
| 3 淡灰色泥砂       |                |



14. その他の遺構 I区北辺には上

坑、ピットなどの遺構が集中する。P146、P148からの出土遺物などから古墳時代末ころの遺構と考えられる。しかしながら掘立柱建物などのまともを見出すにはいたらなかった。

またSB102の北辺に集中するピットP155、P172、P174からは7世紀前半に属する須恵器が出土している。前述と同様に掘立柱建物などのまともを見出すにはいたらなかった。



第15図 SX102平面、遺物出土状況及び断面図

- |         |        |
|---------|--------|
| 1 灰褐色泥砂 | 2 黄灰色砂 |
|---------|--------|



#### 4. 第2遺構面の遺構

I区北半部とII区全域は、小礫を含む比較的堅い褐色泥砂層が遺構面となる。I区北半部では、土坑とピットが検出された。土坑については特記すべき点はない。ピットも建物などにまともなものはなかった。

##### 1. 黄色砂と水田状遺構

I区南半部で黄色の洪水砂が検出された。東西約16m南北6～8mの範囲である。洪水砂を取り除くと褐色砂泥層の水田状遺構が検出される。水田状遺構を覆う黄色砂からは、須恵器杯身、高杯、壺、甕、樽型甕、土師器高杯、小型丸底甕、甕、製塩土器などが出土した。遺物の時期は古墳時代中期頃と考えられ同時期以降の洪水の所産である。第4次調査では、古墳時代前期初頭とする時期の畦畔状遺構が検出されている。当調査とはほぼ同時期頃であろうか。

水田状遺構は、幅2.5m、長さ5～8mほどの長方形の区画の水田とこの水田を挟む幅1.2m、高さ0.1m前後の畦畔が明瞭に検出された。この2区画の水田の西側には、直線的ではないが幅0.4～0.6m、高さ0.05mの畦畔と2区画の水田とは約0.1mの落差を持つ水田が検出された。また反対の東側では、約0.1mの落差を持つ水田が検出された。

当調査地区周辺では、水田を形成するような比較的広範囲におよぶ平坦面が存在したことが考えられる。集落を形成した時期、古墳を形成した時期、水田を形成した時期など遺跡景観を復元するに重要な資料を提示している。

ほかに水田状遺構面では、長さ1.5m、幅10mm前後、北東から南西方向に走る噴砂が検出された。

##### 2. SD202、SD203

SD202、SD203は形状から見てもいわゆる水路状の遺構ではなく、一定の時期の堆積状況を示した結果と考えられる。SD202は黄色粗砂、SD202の東端でSD203の堆積土(黄褐色泥砂)覆うように検出された。それぞれ少量の土師器、須恵器が出土した。

##### 3. SD204

SD204はSD203に切れ、水田状遺構の堆積土を除去して検出された溝状遺構である。幅0.4m、深さ0.1mの規模である。土師器の小片が少量出土した。

##### 4. I区その他の遺構

SD203の北側では、ピット、土坑が検出された。ピットは建物などにまともなものはなかった。SK202は、北半を攪乱孔によって損なわれている。径0.7m、深さ0.2mの円形の土坑である。

SK203は、南端を攪乱孔によって損なわれている。幅0.5m、長さ1.2m、深さ0.2mの長方形の土坑である。SK204は、SK205に切られる幅0.4m、長さ1.2m、深さ0.1mの長方形の土坑である。SK205は長径1.0m、短径0.6m、深さ0.1mの円形の土坑である。SK203から須恵器環蓋が出土し、図化することができた。しかし他の土坑からは、少量の土師器片、須恵器片が出土したにとどまる。層位から古墳時代後半の時期に属する遺構であると判断した。また遺構の性格について言及する材料が乏しい状況である。

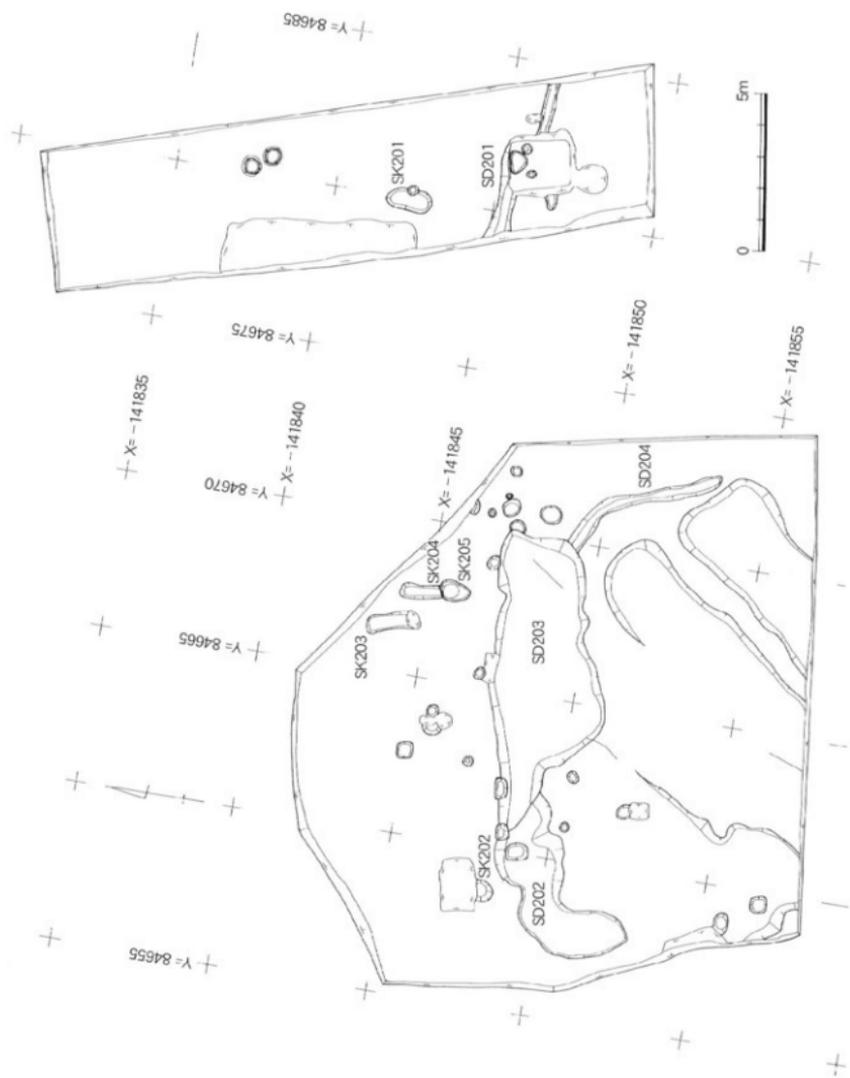
I区南西部では、南東部より粗い砂の堆積で、畦畔状遺構を挟むような堆積であり、水田状遺構を形成する褐色泥砂層の面積は部分的であった。下層ではピットが2ヶ所検出された。

##### 5. II区の遺構

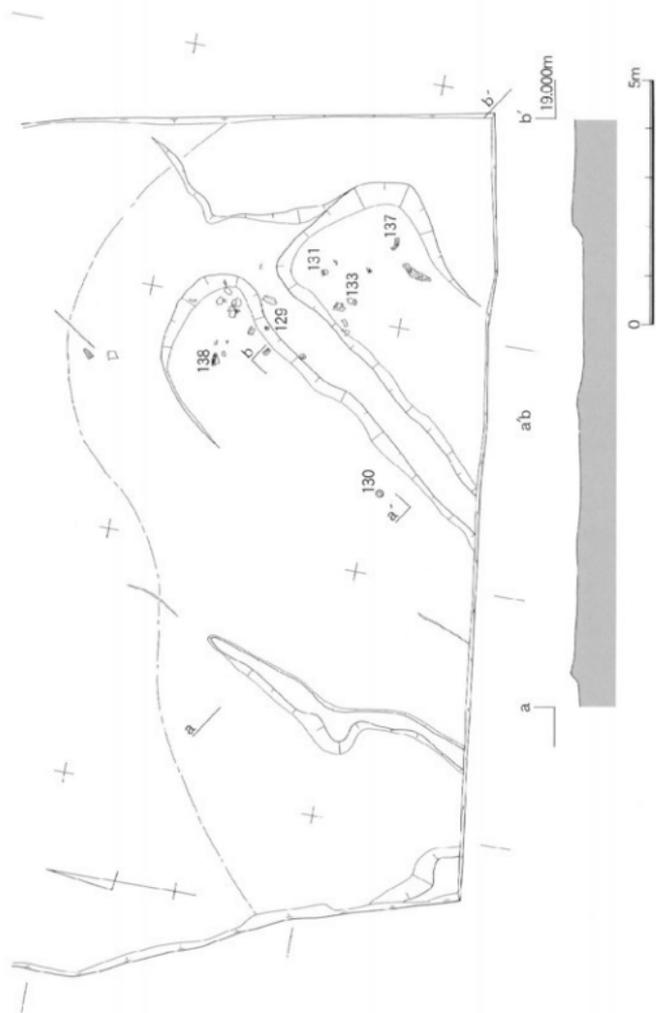
II区では、土坑、溝状遺構、ピットが検出された。SK201は、東西0.6m、南北1.4m、深さ0.2mの楕円形の平面形を示す土坑で、古墳時代の甕が3個体ほど横倒しになったような状態で、焼土、炭などともに検出された。

単に廃棄用土坑ではないと考えられるが、現状では性格については不明である。

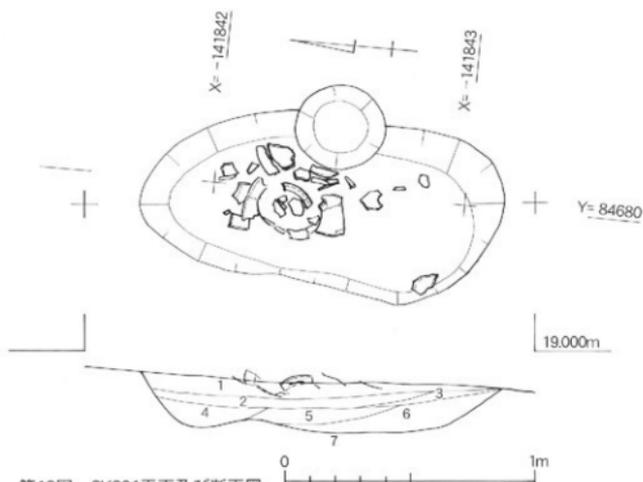
SD201は、遺構内の堆積土が同一であるため、攪乱孔を挟んでY字状に検出されたが、同一の溝状遺構であると判断し調査を行った。幅0.3m、深さ0.1mの規模である。



第16図 第2遺構面平面図



第17圖 水田状遺構平面、遺物出土状況及び断面圖 破線：洪水砂範圍



第18図 SK201平面及び断面図

- 1 淡褐色砂泥(粘土、炭泥) 2 黒色泥砂 3 明黄褐色砂泥 4 褐色泥砂  
5 灰褐色泥砂 6 茶褐色泥砂 7 濁黄褐色混雑泥砂

## 5. 小結

第1遺構面では、土坑17基が検出された。しかしながら土坑の形状や出土物より、遺構の性格を特徴づける材料に乏しく、今後さらに検討を加えなければならない。

竪穴住居は、9棟検出された。SB107が、SB108を切る状態である以外に、それぞれの竪穴住居同士の切りあい関係はなかった。

竪穴住居は、同一軸線を示すものがある(表2参照)。SB101、SB105、SB106(及びSB107、SB108)は、 $N 8^{\circ} W$ を示す。SB102とSB104は、 $N 9^{\circ} E$ を示す。またSB109は $N 20^{\circ} W$ を示し、前2群と異なる。ほかにSB103は $N 40^{\circ} W$ 、SB109は $N 20^{\circ} W$ である。SX102は竪穴住居ではないが、遺構の軸線としては $N 8^{\circ} W$ を示す一群と近い方位を示す。

掘立柱建物の軸線については、SB110は $N 2^{\circ} W$ 、SB111は $N 9^{\circ} W$ 、SB112は $N 10^{\circ} W$ である。

SB105、SB106は、近接して検出された。同時に存在することは通常考えられないため、新旧を判断しなければならない。しかしながら遺物からみても判断しがたく、あえて坏身の形態からSB106が新しいのではないかと考える。この仮定も遺物については、ほとんど時期差はない。

遺物については次章で述べるが、ここで切りあい関係及び遺物を含めて、各遺構の時系列について触れておきたい。まずSX103は、遺物の型式や切りあいから最も古く位置付けされるであろう。続いてSK103-P146-SB103-SB101-SB102-SB109あたりが6世紀半ば以降後半にかけての遺構となる。SB104-SD101-SB105-SB106-SB110-SB111(SB112)-SX101-SX102-P174-SK115が飛鳥時代以降奈良時代にかけての遺構と考えられる。

SB102やSB104( $N 9^{\circ} E$ )やSB103( $N 40^{\circ} W$ )、SB103( $N 20^{\circ} W$ )は、SB101、SB105、SB106( $N 8^{\circ} W$ )を示す遺構群と比べ方位が異なるものや大きく角度が違う。これは、おおまかにみれば、 $N 8^{\circ} W$ 遺構群を挟んで古い遺構と新しい遺構が存在するようである。つまり古墳時代終末から飛鳥時代にかけての遺構群が $N 8^{\circ} W$ を示すのではないかと考える。

第2遺構面調査後、I区、II区それぞれで第2遺構面を人力および重機により断ち割り作業を行い、下層での遺構、遺物の存否を確認した。調査の結果遺構、遺物は発見されなかった。

## 6. 第1遺構面の出土遺物

1. 遺物包含層1 古墳時代から奈良時代にかけての上師器、須恵器がその大部分をしめる。中世に属する遺物はわずかで、また黒色土器については散見される程度である。弥生土器は含まれない。ほかに移動式カマド片、鉄釘、鉾澤、土鍾、石鍾などが出土した。包含層1として第1遺構面を覆う堆積上に含まれる主要なものを第19図に示した。

1は、東播系の須恵器甕底部である。12世紀頃の時期と考えられる。2は土師器甕底部で、形態から時期は10世紀前後であろうか。3は須恵器壺底部である。4は須恵器杯で、高台はやや崩れ気味である。外面底部には1条のヘラ描きがある。

5から8は土師器杯である。5は内面と口縁部は丁寧なナデ調整を施す。外面底部の調整は表面の残存状況が悪く不明であるが、ケズリは施さないようである。6も同様に口縁部は丁寧なナデ調整を施す。7は口縁部はナデ調整で口縁端部はつまみあげるように仕上げる。内面はナデ、外面にはやや粗いハケ調整を施す。器壁は分厚く造られている。古墳時代に属するものと思われる。8は内面に放射状に暗文を施す。外面底部はケズリでなく粗いナデである。

9から22は、須恵器杯蓋、杯身である。9は窯内で爆ぜたのでであろうか天井部が膨らんでいる。また濃緑灰色の自然釉がかかっている。11と14は、ともに完形品ではないが、天井部に1条ヘラ描きがあり窯印の可能性がある。16、17は杯身で、17は底部ヘラ切り後に粗いナデ調整をほどこす。

9から14、16から20は概ね飛鳥時代と考えられる時期に属するものである。この時期に属する供給元となる生産窯は特に不明で、今後解明が待たれる。

23は、土師器杯蓋で、内面から口縁部はナデ、天井部はつまみを中心に井の字状にミガキ調整を施す。胎土は、砂粒をほとんど含まず精良で、色調は赤褐色である。明らかに在地の胎土とは異なり、搬入品と判断されるものである。

25は土師器皿で、内面に放射状に暗文を施す。26は復元径が26cmで甕であろうか。

27は短頸壺で肩部に1条の沈線をもつ。肩部には緑灰色の自然釉がかかる。

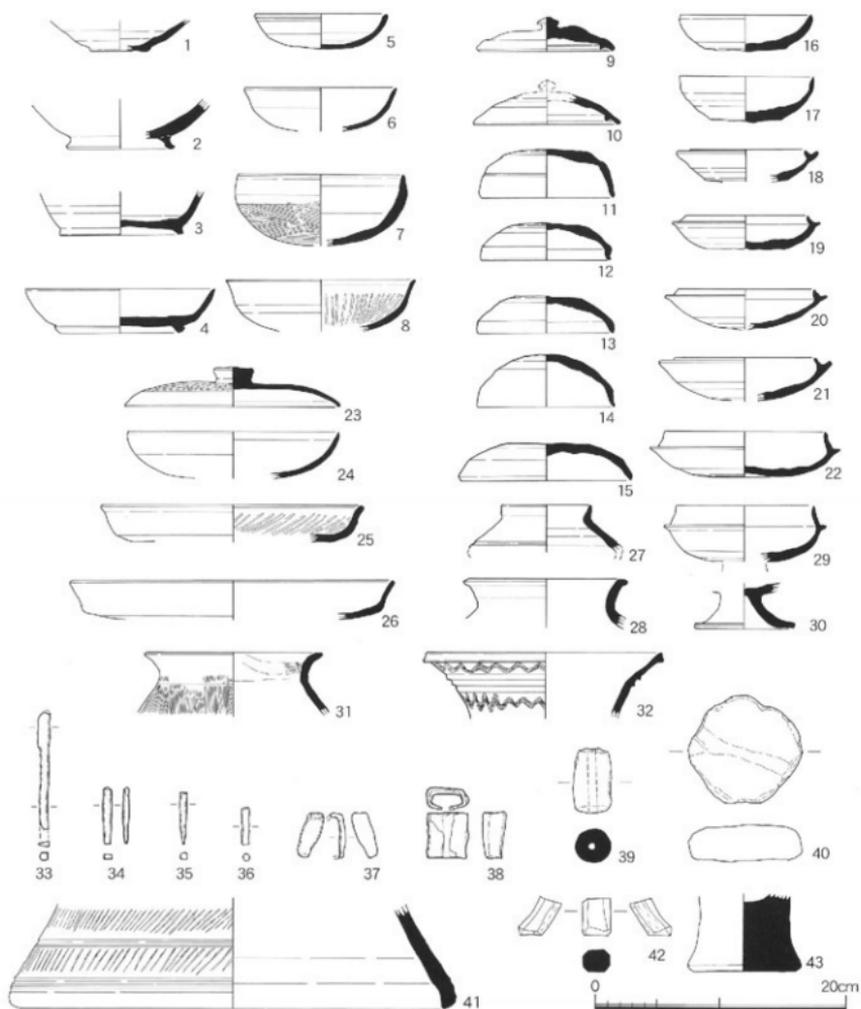
29、30、32は5世紀末古墳時代後期のものである。29は高杯杯部である。30は高杯脚部で焼成が悪い。32は須恵器壺口縁部で、2条の波状文が施され間に2条の突帯をもつ。

33は、鉄鎌で片刃欠鎌とされるものであろう。34は鑿状工具、35は鉄釘である。36は棒状鉄製品で、断面形は円形である。37、38は鉄製品で、38は板状の材をD字状に折り曲げている。いずれも用途については不明である。

39は、管状土鍾である。図化できなかつたが、ほかに棒状土鍾片やイイダコ壺片なども出土している。40は六角形の扁平な石鍾と考えられる。縄掛けと思われる凹みが辺の3箇所ほどにみられる。花崗岩製で重量は338gである。

41は須恵器器台脚端部である。外面にはクシ刺突文を2列配し、緑灰色の自然釉がかかる。42は八面に面取りした脚端部である。上半は折れている。部分的に自然釉がかかる。43は器種不明の上師器である。支脚となる部分であろうか。

その他鉾澤の多くは20～30mm程度のものであるが、うち1点については、65mm×80mmの皿状のものがあつた。



第19图 遺物包含層1出土遺物実測図

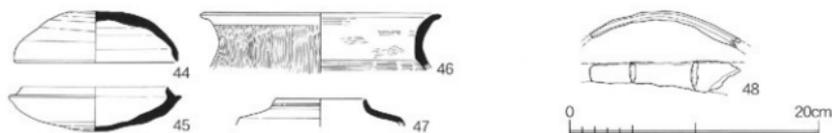
2. SB101

SB101からは、須恵器、土師器、鉄器、鉾滓が出土した。遺構全体を調査していないが、遺物出土量はあまり多くはなかった。44、45、47は須恵器、46は土師器と板状の鉄器48を図示した。

44は杯蓋で、天井部と口縁部をわける凹線はなく丸い天井部である。45は杯身で、体部から口縁部まで分厚く、立ち上がり部分は内傾している。47は短頸壺、口縁部に凹線が入る。

46は土師器甕で口縁端部は、ナデ調整で丸く終わる。内外面はハケ調整である。

48は、鉄刀もしくは鎌などが考えられる板状の鉄器である。「へ」字状に曲がっている。これらの遺物より6世紀後半の時期が考えられる。



第20図 SB101出土遺物実測図

3. SB102

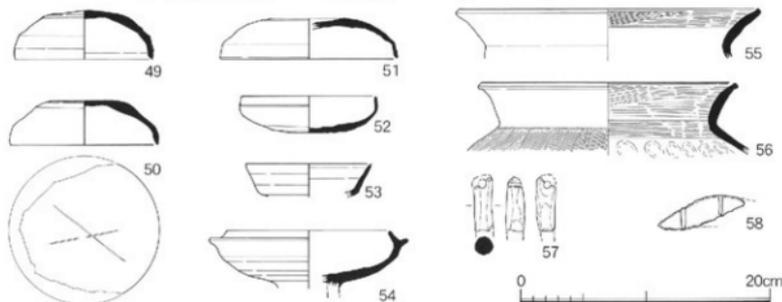
49から51は須恵器杯蓋、52、53は杯身、54は有蓋高坏坏部、55、56は土師器甕口頸部、57は棒状土錘、58は板状の鉄器である。

49、50、52は杯の小型化が始まっている時期を示すものであろう。49、52は径11.0cm、50は径12.0cmである。50の天井部外面に×状のヘラ描きがある。窯印であろうか。52は口縁部に1条の沈線をもつ。

55の口縁端部はわずかに面をもつ。口縁外面はナデ、口縁内面はハケ調整、頸部はナデ調整である。56の口縁端部は少し肥厚する。口縁外面はナデ、頸部から体部にかけてはハケ調整である。口頸部内面はハケ調整、体部内面は指おさえ痕が残る。

58は板状の鉄器である、用途は不明である。

土師器、須恵器等から7世紀前半ころと考えられる。

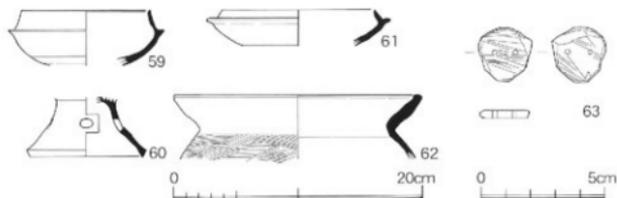


第21図 SB102出土遺物実測図

4. SB103

土師器、須恵器、鉾滓、有孔円盤が出土した。59と61は明らかに異なる時期を示す遺物である。60は須恵器高坏脚部で、四方の円孔のスカシを持つ。62は土師器甕で体部外面はハケ調整、口縁部内外面はナデ調整である。口縁端面は、内側に肥厚する。遺物より6世紀後半の時期が考えられる。

63は緑色の滑石製有孔円盤である。表裏面は削って調整をしている。側面を削る調整は一部にとどまる。長径22mm、厚さ3mm、孔径1.5mmである。



第22図 SB103出土遺物実測図

5. SB105

遺構北辺では、須恵器、土師器（66～68）が、また西辺では、砥石70と鉄製品72が出土した。その他土鏝、鉄釘などを図示した。

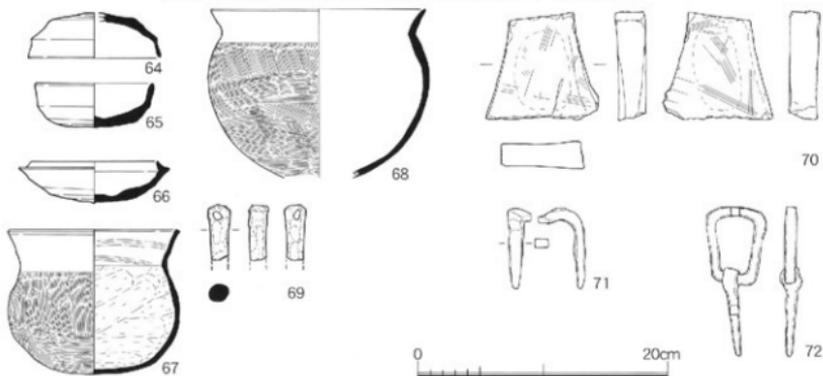
須恵器坏蓋、身は小型化してくる段階のものである。64は内面に火漉がある。65は、ほぼ完存する。3点とも法量に比べ分厚い感じの遺物である。

67は小型甕で、口頸部はナデ調整、外面はハケ調整、内面はケズリ調整を施す。底部がやや平らな傾向の資料である。68も小型甕で、口頸部はナデ調整、外面はハケ調整である。内面については残存状況が悪く不明である。67、68は平面図で図示した箇所から出土した。

69は棒状土鏝である。70は、西辺中央の支柱穴の上面で出土した砥石である。上面と下面のみを使用し、残る4側面は使用されていない。青灰色の砂岩である。

71は、鉄釘で断面は長方形である。72は鉸具と考えられる。台形の輪状部に、帯の孔に通す棒状の一端を尖らせもう一端を輪状にして結合させる刺金としたものである。台形の輪状部、刺金の断面はともに方形である。法量から見ると馬具に用いられたものと推測される。

以上の遺物などからSB105の時期を7世紀前半ころと考える。



第23図 SB105出土遺物実測図

6. SB106

遺構北辺中央に焼土が集中しており、このあたりから土師器の甕78が出土した。また南西部でも土師器甕、須恵器坏、鉄製品、鉸滓などが検出された。南辺床面からは、

焼石が出土した。その他堆積土から土師器、須恵器が出土した。

73から77は須恵器で、73、74と75、76は時期幅がある。75、76はケズリ調整の範囲は体部の1/3以下である。

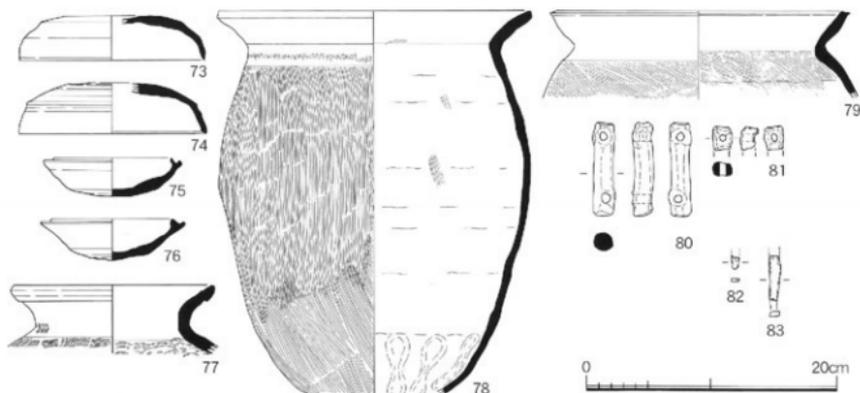
77は口頸部は短く、口縁端部は鈍い稜を持つ。口頸部内外面は、ナデ調整、体部内外面はタタキ調整である。

78は倒卵形の土師器甕で、遺構北辺で出土したものである。口縁端部は外側に面をもつ。外面ハケ、口頸部はナデ調整、内面体部はナデ調整、部分的に粘土接合痕が残る。底部もナデ調整で指頭圧痕が残る。

79は土師器甕で、口縁端部は上方に面をもつ。口頸部はナデ調整、残存状況が悪いが、内外面はハケ調整と考えられる。

80、81は棒状土錘である。82は、断面長方形の鉄製品、83は、鉄釘である。

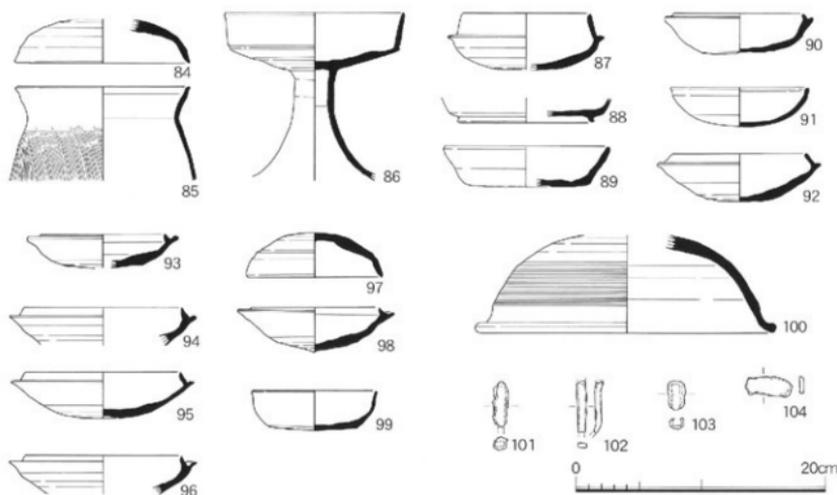
遺物より7世紀前半ころと考えられる。



第24図 SB106出土遺物実測図

7. その他の遺構 SB104からは少量の土師器、須恵器が出土した。図化できたものは1点のみである。
- からの出土遺物 84は天井部と口縁部の境にかろうじてナデ調整による稜線が残る。天井部は丸い。
- SB104 遺構上面で、86の須恵器高環が炭化物と焼土ともに出土した。脚端部以外は完存している。二次的な熱を受けたようで、淡灰色から淡赤褐色に変色している。85は土師器甕で、口縁部はナデ、体部内外面はハケ調整である。遺物より時期は6世紀後半と考えられる。
- SB109
- SB110-P180 建物東辺中央の柱穴P180から須恵器坏身87が出土した。他の7箇所の柱穴からの出土遺物は図化できないような細片であった。
- SK115 土師器、須恵器の小片が多数出土したが、図化できたものは、88と89である。須恵器坏B脚と坏A、坏Aには内外面ともに火禿がある。器形から8世紀以降のものと考えられる。103は、サビ塊である。本体は残存せず、本体の周囲に形成されたサビである。断面形状から鉄釘と考えられる。
- SB111-P3 北東隅柱穴から、須恵器坏身90が出土した。一部欠損し全体に磨耗した遺物である。杯身のたちあがりの一部を意図的にうち欠いて使用したかのように考えられる遺物である。焼成状態は悪い。

- SK103 土師器環91と須恵器環身92が出土した。91は口縁直下の強いナデによって、内外面に凹線状にへこむ。内面の調整は不明である。外面はナデ調整、底面は指押さえ後ナデ調整を施す。92は、立ち上がり部分は内傾し、端部もまるく終わる。外面には自然釉がかかる。遺物より6世紀末から7世紀初めころの時期が考えられる。
- SD101 少量の土師器、須恵器が出土した。図化できたものは、93須恵器環身のみである。7世紀前半ころの時期であろうか。
- P146 P146からは94と95の須恵器環身が出土した。6世紀後半から末ころの時期であろうか。
- P148 P148からもP146と同様の時期の須恵器環身96が出土した。
- P155 P155、P172、P174のSB102の北辺のピットの集中するあたりからは、97、98、99の7世紀前半ころの遺物が出土する。97、99の口径は10.0cm、10.6cmで、小型化の傾向にあるものである。98の底部には自然釉がかかり、重ね焼きの痕跡がある。
- P172
- P174
- SX103 土師器、須恵器の小片とともに遺構南端部で須恵器大型蓋が出土した。他の須恵器の小片には6世紀後半以降のものがあり、遺構の時期は古墳時代後半である。形状から通常器台環部分とも考えられたが、口縁部の形状が異なる。環部であれば、波状文などの装飾があるが、装飾がないことなどから蓋として図化した。100は口縁部に強くナデを施し、口縁端部はまるく終わる。外面中位はカキ目調整、天井部はケズリ調整である。内面はナデ調整である。壺、甕などの蓋として図化した。形状から古い型式に属するものと考えられるが、類例については現状では見当たらず、国立扶餘博物館圖録に類似例がある程度である。



第25図 住居、土坑等出土遺物実測図

84 SB104 85-86 SB109 87 SB110-P180 88-89 SK115 90 SB111-P3 91-92 SK103 93 SD101 94-95 P146  
96 P148 97 P155 98 P172 99 P174 100 SX103 101 SK112 102 SK114 103 SK115 104 P153

その他の鉄製品 101は、SK112から出土した鉄釘である。SK112からは、少量の土師器片、須恵器片とともに出土した。

SK114からは、土師器片、土鍾片が出土した。102は、断面長方形の鉄釘である。

P153からは、微量の土師器片が出土した。104は板状の鉄製品である。用途は不明である。

8. SX101

土師器、須恵器、砥石、土鍾などが出土した。105と106は須恵器坏身、坏蓋で、坏身内面底部には同心円のタタキ痕跡がある。107は土師器小型甕で口縁部はナデ調整、休部に粗いハケ目が残る。

108は砥石で、四面とも使用している。灰色の砂岩である。109と110は棒状土鍾である。遺物から7世紀中ごろから後半と考えられる。

9. SX102

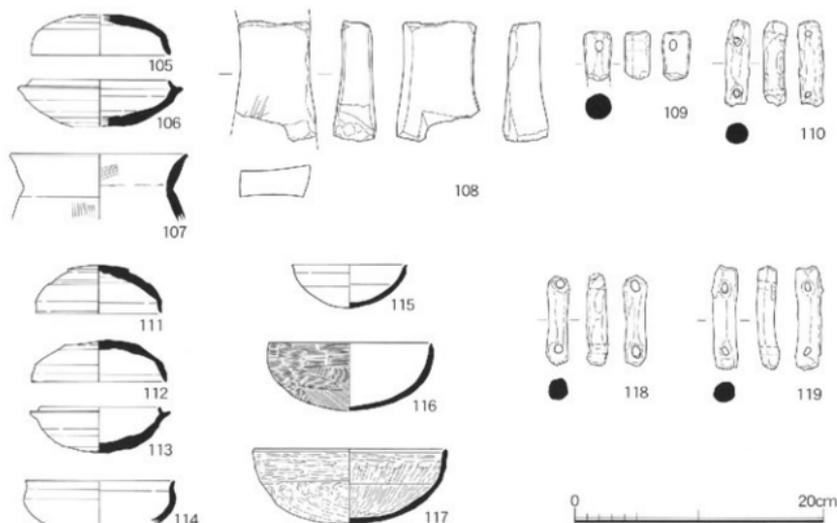
SX102は、遺構の性格は不明である。土師器、須恵器、土鍾などが出土した。111から114は須恵器坏蓋、坏身である。

112は天井部はケズリ調整であるが、窯着の痕跡とヘラで刻んだような箇所がある。113底部には、ケズリ調整後ナデ調整を施す。

115は内外面ともにナデ調整口径9.2cmの土師器坏である。116は外面ハケ調整、内面の調整は不明である。口径13.0cmの土師器坏である。117は口径15.8cmの土師器坏である。口縁部内外面にミガキとナデ調整、外面下半ケズリ調整、内面はミガキ調整を施す。胎土は砂粒をほとんど含まず精良で、色調は赤褐色である。

116については115、117と比較して、外面調整が全体にハケ、胎土はやや粗く、砂粒を多く含むなどから在地性の強い資料であろうか。

ほか118と119は棒状土鍾である。遺物から遺構の時期は、7世紀後半ごろと考えられる。



第26図 SX101・SX102出土遺物実測図

10. 動物遺存体 今回の調査では7世紀の堅穴住居跡の遺構埋土に焼土が混在しており、これらを水洗選別したところ、骨の小片が検出できた（挿図写真9～12）。いずれも火を受けており、食物残渣である可能性が考えられる。ただし全てが細片であり、詳細な同定はできていない。

SB102出土のものは、小型哺乳類のものと思われる大腿骨骨幹部1点と、肋骨の破片がある。大きさからして小型のげっ歯類が推測されるが、その場合、食物そのものではないと考えられる。

SB105出土のものは、小型哺乳類の肋骨片と、哺乳類の長骨破片がある。動物種は明らかでない。

SB106からは哺乳類のものと考えられる長骨の破片である。火を受けて破碎してしまっているため、詳細は不明である

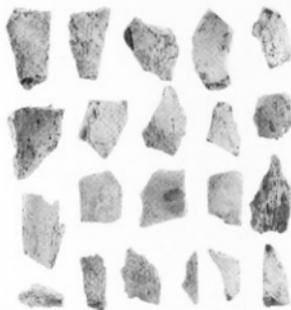
南辺中央土器群（SB109北西部）に伴う焼土からは哺乳類の骨片に混じり、魚骨と考えられる骨が出土している。



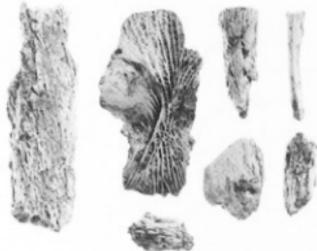
挿図写真9 SB102出土動物遺存体（3倍）



挿図写真10 SB105出土動物遺存体（3倍）



挿図写真11 SB106出土動物遺存体（1.5倍）



挿図写真12 南辺中央土器群周辺出土動物遺存体（3倍）

## 7. 第2遺構面の出土遺物

### 1. 遺物包含層2 包含層2からの遺物量は包含層1に比べ少なくまた図化できた数量もわずかであった。

また包含層2には庄内期、布留期に属する土器や弥生土器を含まない。

120はI区から出土した須恵器環蓋で、天井部は平らで古い型式を示す遺物である。

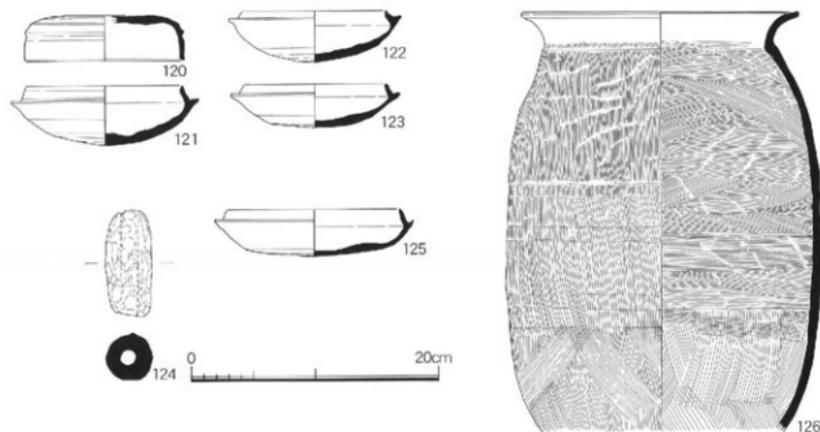
I区北東部で、122と123が出土した。ともに須恵器坏身であるが、口縁部を合わせて検出された。ともにほぼ完形品である。しかしながら遺構を検出するにいたらず、包含層の遺物としてとりあげた。坏内の土壌については、細かく観察したが特記すべきものはなかった。いかなる性質のものであるか不明である。122と123は、ともに非常に焼成状況が悪い遺物である。

121はII区中央で出土した須恵器坏身でほぼ完存する。やや分厚いつくりである。

II区中央から南部で、須恵器坏身と管状土鍾、長胴甕が出土した。須恵器坏身125と土鍾124が近接して第2遺構面で出土した。125はほぼ完存し、底部外面にはタタキ痕がありその後ケズリ調整をする。須恵器坏身の形態から6世紀後半ころの時期が考えられる。

126はII区中央部で出土した長胴甕で、底部は不明である。126は包含層2からとして図示したが、SB101の検出時に一部が出土している。口径(22.4cm)が腹径(25.5cm)を上回る。口縁部内外面ともナデ調整で、おおきく外反する。体部内外面ともにハケ調整である。外面のハケ調整は、体部上1/3にかけては細かい縦方向のハケ調整、体部中央から下2/3はやや粗い縦方向のハケ調整である。内面は体部上2/3は細かい横方向のハケ調整、下2/3はやや粗い縦方向のハケ調整である。体部外面には粘土紐の接合痕が3条ほど観察できる。7世紀以降のものと考えられる。

120の須恵器環蓋と121や122・123の坏身、126の長胴甕などから包含層2の時期幅があることが考えられる。



第27図 遺物包含層2出土遺物実測図

## 2. 黄色砂

黄色砂は、1区南半部の水田状遺構を覆う洪水砂である。

127と128は須恵器坯身である。底部はまるみをもち立ち上がりや長いことなどから、TK23もしくはTK47型式と考えられる。129は、須恵器高環脚部で二方透かしである。

130は土師器高環脚部で、口縁部と脚部は欠損している。内外面ともに調整は不明である。131は小型丸底壺で、体部外面と口縁内面はハケ調整、口縁および体部内面はナデ調整、底部内面には指頭汗痕が残る。

132は高さ8.4cm、体部最大径5.6cm、口縁部径3.4cmの口が窄まる形の製塩土器である。

133は小型甕で、口縁部外面ナデ体部外面縦方向のハケ調整、口頸部内面は横方向のハケ調整、体部内面は縦方向のケズリ調整である。

134は円筒埴輪片で、埴輪片はこの1点のみである。口縁部内外面ともナデ、体部は内外面とも縦方向のハケ調整である。タガは横方向のナデ調整で、タガ断面はMの字がつぶれたような形である。タガの直下に円形であろうスカシ孔があり、ケズリのみによる整形である。川西編年V期にあたると思われる。

円孔部もつ体部135と両側部136の一部が出土した。樽型甕として復元図を掲げた。体部片は円孔を挟んで左右に1条ずつ鈍い稜の突帯を持ち片側には波状文が施されている。両側部にも1条の突帯を持つ。

137は、大型壺もしくは甕の口縁部であろうか。復元口径38.4cmで、口縁部が直線的に立ち上がり、口縁端部はまるく終わる。口縁下に突帯を2条、頸部付近に突帯2条をもち、その間に2条の波状文を施す。

138は須恵器大型甕で、幅約2m、長さ約5mほどの範囲に散乱して出土したが、接合の結果、口縁部が半分、体部約四分の一程度残存していた。口径39.8cm最大径69.2cm高さ77.6cmに復元することができた。最大径を示す部分が体部上半にあり、やや肩が張り、先が窄まる形状である。口縁端部がわずかに上下に拡張する。口縁端部直下に2条の突帯と波状文を挟んで2条の突帯をもつ。この突帯はやや鋭さに欠ける。以下肩部接合部分までナデを施す。体部外面は肩部から底部近くまで平行タタキで、底部に関しては平行タタキが交差して施される。内面は肩部までナデ調整、口縁部、頸部と胴部の接合部まで指押さえによる汗痕が残る。体部中央部分では同心円タタキが比較的よく残り、肩部や底部に近い部分はタタキが消されており、底部に関しては完全にナデ調整により消されている。136から138は、TK208型式であろうか。

これらの遺物から、TK208型式からTK23型式と考えられる。5世紀半ばから後半にかけての遺物と考えられ、水田状遺構はこれより以前の時期が考えられる。

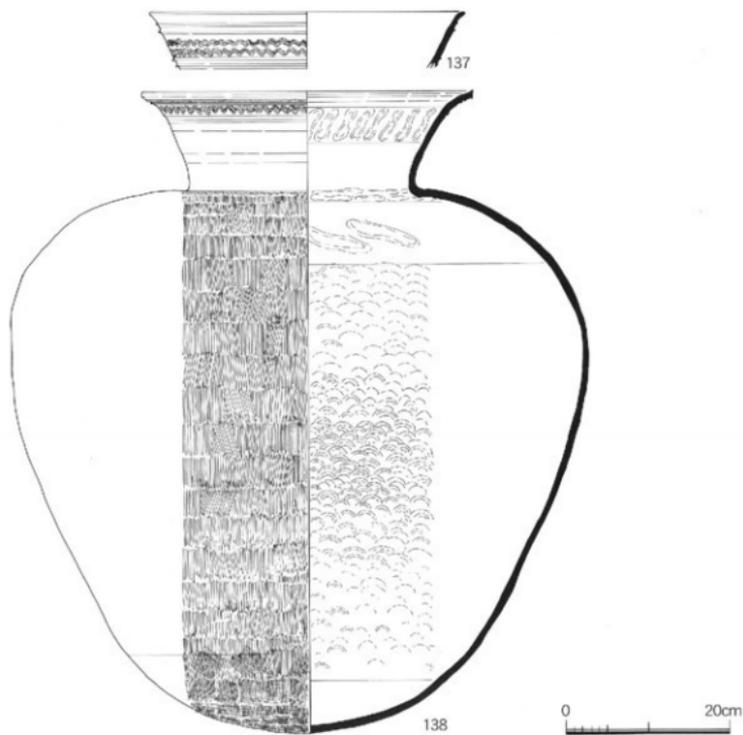
## 3. SK201

甕3個体と土鍾が出土した。139は口径12.8cm、最大径13.4cm、高さ14.9cmでほぼ完存する。内外面ともに表面残存状況が悪く調整はわかりにくい。外面はほぼナデ調整、内面は底部にケズリ痕が残るがナデ調整である。口縁端部はまるく終わる。丸底の小型甕である。

140は口径17.8cmで、口頸部はナデ、体部はハケ調整後ナデ、内面はハケ調整を施す。口縁端部はまるく終わる。おそらく体部は141と同様に丸い体部であろう。

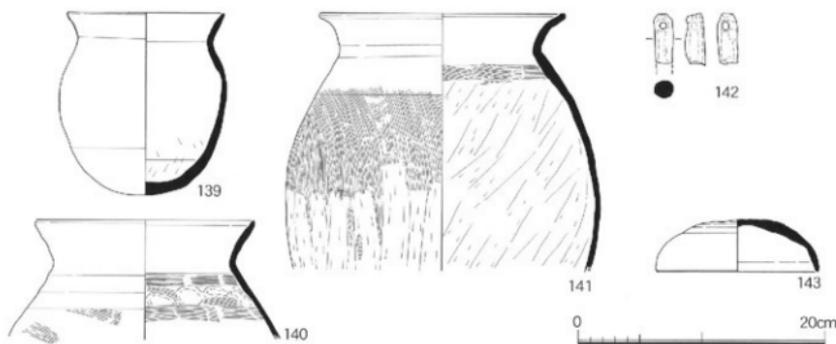
141は口径19.9cm、最大径25.3cmで、口頸部はナデ、体部は上半部ハケ、下半部はケズリ調整である。内面は頸部に横方向のハケ調整があるが、体部はケズリ調整である。口縁端部はまるく終わる。SB106の甕78より丸い体部である。

142は棒状土鍾である。SK201から1点のみ出土した。



第28图 黄色砂出土文物实测图

4. SK203 143は、須恵器環蓋である。天井部と口縁部の境界は不明瞭で、口縁端部も丸くおわる。焼成状況は悪い。



第29図 SK201・SK203出土遺物実測図

## 8. 小結

前節の小結で、壑穴住居等の軸線と遺物から導き出せるおおまかな新旧関係について触れたが、特に古墳時代終末から飛鳥時代については、その時期差を示すことは非常に難しい。

次に土師器甕について少し触れる。SK201の遺構の性格については、不明瞭であるが、甕3個体と土鍾が出土した。141は丸い体部の甕である。SB106の78は141ほど丸くはなく倒卵形の甕である。126は上述したように出土層位に不明な部分があるが、遺物のみをみていくとやや肩が張り、長い体部を持つ甕である。この141、78、126から、球体の胴部をもつ甕141が、78のような型式を経て126のように長胴化していく傾向が読み取れるようである。

甕の口縁部からは、126などの口縁端面は丸く終わるが、55、78、79は口縁部に面をもつ。62は端部に肥厚する。

おおまかに3個体の甕の時期を示すと、141は古墳時代後半から終末、78は飛鳥時代、126は7世紀以降として捉えられそうであるが、それぞれの時間差はいうまでもなく一定ではない。

この間隙を埋める資料の調査、検討は今後の課題としたい。

### 第3章 まとめ

今回の調査では、2面の遺構面が検出された。第1遺構面は、古墳時代後期から飛鳥、奈良時代にかけての時期で、堅穴住居、掘立柱建物などが検出され、周辺で検出されている住吉宮町古墳群より遅れる時期の集落址である。また第2遺構面は、古墳時代中期頃の水田状遺構などが検出された。住吉宮町古墳群や西接する郡家遺跡の南部で検出された水田状遺構とはほぼ同時期である。

住吉宮町遺跡では、これまでの調査で、墓域、生産域、居住域を構成する遺構が検出されている。時代と遺構を整理することによって遺跡の動向について知ることのできる重要な要件を兼ね備えた遺跡である。ただしこれまでの調査でも生産域を示す遺構はわずかである。

今回の調査では、集落址や水田状遺構の検出されたことは当遺跡にとって重要な資料を得たこととなる。

現地調査中の2008年9月13日（土）には、発掘調査の成果を広く一般市民の方々に知ってもらう目的で、現地説明会を開催した。遺構や遺物の説明の中で、参加者により理解しやすいように、時代はやや下がるが万葉集山上憶良「貧窮問答歌」（8世紀中頃）の情景を生活風景として、また仏教伝来から聖徳太子の十七条憲法（6世紀後半から7世紀）を時代背景として取り上げた。

堅穴住居からの焼土等の分析から、第2章10. 動物遺存体の項では、明確ではないとした上で、SB102で小型哺乳類げっ歯類の骨が出土している。「貧窮問答歌」の「…瓶には蜘蛛の巣懸て…」のような状態で、クモ等の動物遺存体は極めて残りにくいが、ネズミのような小動物が家の中を走っていたのであろうか。

また南辺中央十器群（SB109の北西部）に伴う焼上からは、食用であった魚骨が出土している。漁労具の出土から魚を食料としていたことが窺える。

同じく第1遺構面では、古墳時代後期から奈良時代にかけての住居等が発見された。この時期は大陸から仏教をはじめ法制度など様々な文化が伝わった。都では儒教、仏教により国家を治める指針とし、律令制度による法治国家をめざそうとしていた。

仏教伝来（552or538）（註1）、聖徳太子作と伝えられる「十七条憲法（604）」から大宝律令の制定（701）にいたるこの時期と重なる（註2）。対外的には国家を世界標準に向けて体裁を整えることが急務であった時代である（註3）。

国家として法を整え、文字により人民の支配を進めていく（註4）。周辺遺跡での文字資料は、住吉宮町遺跡では、「橋東家」「免」（8世紀後半）の墨書土器（第23次）、深江北町遺跡では、「驛家」などの墨書土器や承和年木簡（9世紀前半）（山本編2002）、隣接する芦屋市では、三条九ノ坪遺跡出土の壬子年木簡（652年）（高瀬1997）や同市の寺田遺跡「大領」「少領」（8世紀頃）の墨書土器（森岡・竹村1997）などがあげられる。

他に神戸市内では、古田南遺跡の木簡等（8世紀末から9世紀初頭）（柴原1990）や北区宅原遺跡での「評」（701以前）（丹治・西岡1998）や「五十戸」（安田・山口1990）の墨書土器等があげられる。「貧窮問答歌」の「楚取る里長が聲は寝屋戸まで来立ち呼ばひぬ」のように家の前で答をもった里長の呼び立てる声が聞こえてきそうである。文字資料が周辺に数多く類例が存在するわけではないが、国家による人民の支配は善実に進められていたようである。

繰り返すが、古墳造営の価値観を取戻させ、新たなる価値観をもった仏教によって国

家を治め、東アジアの情勢のなかで立ち遅れた状況を打開すべく、国家を世界標準に向けて整備しようとしていた。仏教伝来までの様々な文化の受容の内容は、技術や文物の移入であり、仏教や法体系の受容とは本質的に異なるものである。

しかしながら「十七条憲法」にもこまれた高邁な精神性や仏の教えは、発掘調査だけではなかなか見えてはこないようである（註5）。

反対に生活に密着した生産技術等は伝播し、需要され、生活用具にも現れてくるのであろう。SX102等の出土土器では、在地的な土器が存在する一方で、調整技法や精良な胎土などから搬入された土器が存在する（註6）。

第2遺構面では、住吉宮町遺跡の古墳群と大差ない時期の水田状遺構が検出された。当調査地に近接する北西約50mの第17次調査地では墓域がひろがる。また隣接する第27次調査地でも古墳時代土坑墓が検出されている。

第30図に示すようにJR軌道と国道2号線との傾斜と国道2号線以南の傾斜とを比較すると前者が後者に比べ緩傾斜であることがわかる。これは現代の地形のみならず各時期を通じて同様のことが言えようである。

国道2号線以北には、以南に比べ緩傾斜地形が存在することが読み取れ、より安定した地形に古墳が築造されている。古墳群が形成される時期の生産域は、第45次調査地から郡家遺跡御影中町地区や第33次調査など国道2号線以南にひろがっていたと考えられる（註7）。遺跡の中の一部を垣間見ただけで判断し難いが、墓域と生産域とは混在しないのではなかろうか。この仮定が正しければ、住吉宮町古墳群の墓域の西南端を示すこととなるだろう。

以上雑然と述べてきたが、当調査によって多くの知見を得ることができた同時に、新たに浮かび上がる課題もある。見出された課題については、今後の検討に期したい。

註1 538年説は、元興寺縁起に基づく。552年説は、日本書紀百濟聖明王が仏教經典を伝える記事に基づく。聖明王の父祖である武寧王の王陵発掘調査の成果によって聖明王の即位年代が明らかとなった。

註2 この時期は日本列島のみならず大陸、半島は激動の時代であった。仏教伝来から平城遷都（710）までの出来事を時系列でならべると伽耶小国連合の滅亡（562）、第1次遣隋使、第1次新羅征討軍編成（600）、十七条憲法（604）、第1次遣唐使（630）、百濟大寺（639）、乙巳の婁（645）、大化改新、薄葬令（646）、班田収受法（652）、白村江の戦い（663）、大津京（667）、高句麗滅亡（668）、飛鳥京（672）、統一新羅（676）、藤原京（694）、大宝律令（701）等となる。対外的に遅れをとる日本列島では、国家の体制を整えることが急務であった。

隋書東倭伝倭國条第1次遣隋使開皇20年（600）条と同第2次遣隋使大業3年（607）条に現れるように、隋から文明国ではないとの指摘を受け、第2次でこれを改め朝貢した。この間の事情は日本書紀には現れない。その一方で半島の情勢に対応するため新羅征討軍を編成している。軍備の根拠として戸籍の作成は必要不可欠な状況であった。

註3 近年の発掘調査の成果として、吉備池廃寺の巨大な基壇があげられる。規模等から、新羅の皇龍寺と同様の九重塔が建てられていた可能性がある（松村1988）。日本書紀にある百濟大寺（639）であれば、当時の世界標準を満たすものとして象徴的な事例であると考えられる。

註4 「十七条憲法」、「改新の詔」、「班田収受法」、「大宝律令」等



註5 聖徳太子の「十七条憲法」は必ず歴史の教科書に載り、誰もが知っている歴史上の事実として理解されている。しかしながら「十七条憲法」は、720年に成立した日本書紀に100年以上前のこととして記載されている。作者が聖徳太子ということについて、津田の研究以来加藤の言に至るまで、儒教に基づき漢語によって作成された精神論で、聖徳太子は優れて思想家であった。ただし石母田のように偽作説を採らない研究もある。

註6 「律令的土器様式」小森俊寛「概説」『古代の土器1』『都城の土器集成』古代の土器研究会編1992

註7 第1・2・4次調査古墳(標高30m)が当調査水田形状橋南(標高19m)より高い位置にあるのは、東から西へ地形が下がっていることを示す。ほぼ同時期の墓域と牛床域のしめる高低差である。さらに東の第32次調査古墳(標高21m)をみると、さらに東へ高い地形であることがわかる。第15次調査周辺から西側つまり郡家遺跡南部に牛床域がひろがると考えている。また居住域は郡家遺跡北部や住吉宮町遺跡にあったと考えられる。

## 第2章・第3章参考文献

石母田正「日本古代国家論第一 部-官僚制と法の問題-」(第四章) 岩波書店1973

加藤周一「日本文学史序説上(第一章) 筑摩学芸文庫1999

川西宏幸「日向植輪論」考古学雑誌第62巻第2巻1978

「古代の土器1～3」『都城の土器集成、Ⅱ、Ⅲ』古代の土器研究会編1992～94

「古代の土器4 点炊具(近畿編)」古代の土器研究会編1996

小森俊寛「京から出土する土器の編年的研究」京都編集上房2005

高瀬一嘉編「三峯九ノ坪遺跡」兵庫県教育委員会1997

田辺昭三「陶器古窯址群1」平安学協会考古学クラブ1966

田辺昭三「須恵器大成」角川書店1981

丹治・西岡「宅原遺跡(岡下地区)」昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1988

津田左右吉「文学に現われたる我が国民思想の研究(一)」(第一回第一章) 岩波文庫1977

今井修編「津田左右吉歴史論集」岩波文庫2005

服部 寛・寒川 旭「住吉宮町遺跡第33次調査」兵庫県教育委員会2002

「扶餘博物館陳列品圖鑑 先史・百済文化」図版66P42国立扶餘博物館1977

松村志司「幻の百済大寺発見青備池庵寺」『発掘された日本列島1968』1968

柴原永遠男「59吉田南遺跡」日本古代木簡道木簡学会編著P234～236岩波書店1990

森岡秀人「摂津八十塚古墳群と兔原郡葦屋郷・賀美郷周辺の古代史」『八十塚古墳群の研究』関西大学考古学研究室編2002

森岡・竹村忠洋「平成8年度国庫補助事業寺田遺跡(第90地点)発掘調査報告書」芦屋市教育委員会1997

安田・山口英正「宅原遺跡(豊浦地区)」昭和62年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1990

山本編「深江北町遺跡第9次埋蔵文化財発掘調査報告書」神戸市教育委員会2002

山上恒良「892首窮問答歌」万葉集巻五「萬葉集」高木市之助、五味智英、大野晋校注 日本古典文学大系5 岩波書店1959

『小学社会6年上』清水毅四郎他21名人取書籍株式会社2006

『社会科中学生の歴史』黒出口出男、小和出哲男、成田龍一、里井洋一、真栄平房昭、仁藤教史、土屋武志、梅津正実 株式会社帝國書院2006

『詳説日本史改訂版』石井通、笠原一男、児玉幸多、笹山晴生(ほか8名) 株式会社山川出版2003

写 真 图 版

# カラー図版

第1 遺構面空中写真



第2 遺構面空中写真



調査地周辺空中写真





I区第1透構面全景 南東から



II区第1透構面全景 南から



I区第1遺構面全景 南東から



SB105・SB106検出状況 南東から



SB101検出状況 北から



SB103検出状況 東から



SB102検出状況 東から



SB102検出状況 北から



SB105検出状況 南から



SB105カマド状遺構検出状況



SB106検出状況 南から



SB109検出状況 西から



SB110検出状況 西から



SB111検出状況 北から



SX102遺物出土状況 東から



SX103遺物出土状況 東から



黄色砂遺物出土状況 西から



黄色砂遺物出土状況 北から



I区第2遺構面全景 東から



I区第2遺構面全景 北から



Ⅱ区第2遺構面全景 南から



Ⅱ区SK201遺物出土状況



SB101鉄器出土状況



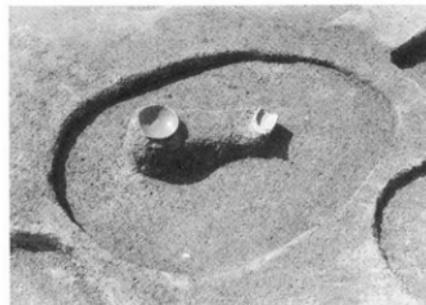
SB105鉄器出土状況



SB106土器壘出土状況



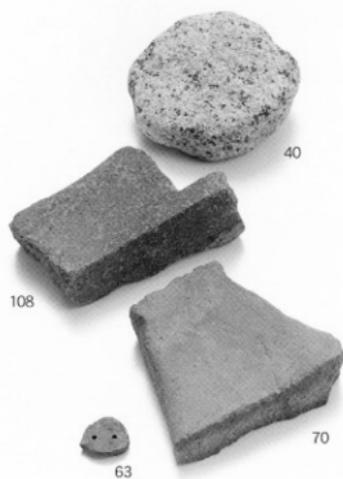
SB109西北部須恵器高环出土状況



SK103遺物出土状況



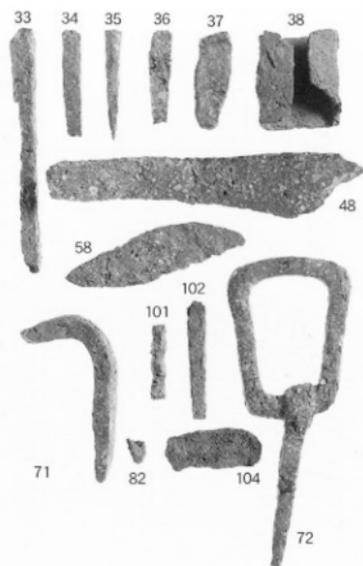
I区北東部包含層2須恵器坏身出土状況



出土石器写真



出土土锤写真



出土鉄器類写真



出土鉄器類レントゲン写真



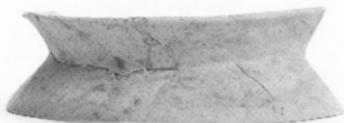
5



52



12



56

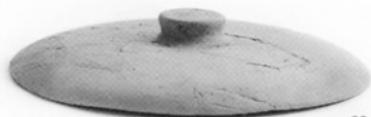
SB102出土遺物



13



64



23

包含層 I 出土遺物



65



44

SB101出土遺物



50

SB102出土遺物



67

SB105出土遺物



75



86

SB109出土遺物



76



90

SB111P-3 出土遺物



78

SB106出土遺物



91



92

SK103出土遺物



98

P172出土遺物



115



100

SX103出土遺物



116



112



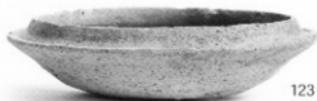
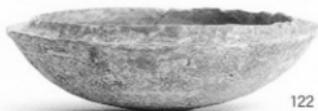
113

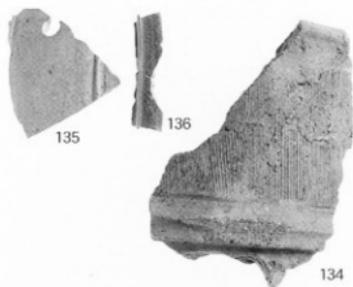
SX102出土遺物



117

SX102出土遺物





135

136

134



137

黄色砂出土遗物



130

黄色砂出土遗物



140



141

SK201出土遗物



138

黄色砂出土遗物



143

SK203出土遗物写真

## 報告書抄録

ふりがな	すみよしみやまちいせき だい45じ ほくつちょうさほうこくしょ							
書名	住吉宮町遺跡 第45次 発掘調査報告書							
副書名	神戸市東灘区住吉宮町7丁目における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	口野博史・阿部 功							
編者機関	神戸市教育委員会							
所在地	〒650-8570 兵庫県神戸市中央区加納町6丁目5番1号 TEL 078-322-6480							
発行年	西暦2010年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
すみよしみやまち 住吉宮町 遺跡	兵庫県神戸市 東灘区住吉宮町 7丁目79番	28101	1-39	34度 43分 4秒	135度 15分 28秒	2008.07.22 ) 2008.10.22	427㎡	共同住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
住吉宮町遺跡	集落跡	古墳時代 飛鳥時代 奈良時代		竪穴住居、掘立柱建物、 土坑、ピット、水田状遺構		土師器・須恵器 鉄製品・砥石		
要約								
<p>当調査では、古墳時代後期（第2遺構面）と古墳時代後期から奈良時代にかけての遺構面（第1遺構面）が2面確認された。第2遺構面では、水田状遺構と土坑、溝などが検出された。第1遺構面では、竪穴住居9棟、掘立柱建物3棟、土坑、ピットなどが検出された。古墳時代後期から飛鳥時代にかけての集落の様子を窺うことのできる資料が得られた。</p>								

### 住吉宮町遺跡第45次発掘調査報告書

— 神戸市東灘区住吉宮町7丁目における  
共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

2010. 3. 31

発行 神戸市教育委員会文化財課  
〒650-8570 神戸市中央区加納町6丁目5番1号  
TEL 078-322-6480

印刷 有限会社 岡印刷出版  
〒652-0804 神戸市兵庫区塚本通3丁目1番25号  
TEL 078-577-2243

